

# 「移住支那人」の再認識 —日本の台湾領有初期における地誌的文献に見る台湾漢人

周 俊宇

## Taiwan Han Chinese recognition of geographical literature in the Early days of Japan's possession of Taiwan

JHOU Jyun-yu

### はじめに

1894年から1895年にかけて、東アジアで画期的な意味を有する日清戦争が行われた。この戦争は、東アジアの大国であった清朝の威信に大きな影響を与えた一方、戦勝国の日本は下関条約により台湾を領有し、東アジアで最初の植民地帝国となった<sup>1</sup>。そもそも、資源や領土などの獲得は、帝国の拡大としてプラスな面が多いが、従来そこに暮らしてきた住民となると、人的資源として相互関係を築くことも可能だと考えられるものの、その実際の対処に関しては、異文化間の摩擦や衝突などから、統治者の頭を悩ませる部分が多く、そう単純ではない。

台湾領有初期において、日本人が新しい統治階層として台湾住民を如何なる視線で見ていたのか。これまで、先住民に関する研究は多くの蓄積があるものの<sup>2</sup>、住民の主体たる漢人に関しては、旧慣調査や人口・種族センサスなどの事業の実態や経緯が解明されてきたが<sup>3</sup>、領有当初の認識についてはまだ解明されていない。

---

1 川島真「東アジア世界の近代 一九世紀」、和田春樹他編著『東アジア世界の近代 19世紀』岩波書店、2010年所収、41-43頁。

2 例えば、山路勝彦『台湾の植民地統治：〈無主の野蛮人〉という言説の展開』日本図書センター、2004年や松田京子『帝国の思考—日本「帝国」と台湾原住民』有志舎、2014年など台湾先住民への認識を対象とした研究には、領有初期の視線についても触れられている。

3 旧慣調査について、福島正夫・後藤武秀・鈴木一郎・三木健などの研究がある。また人口センサスに関しては、富田哲の研究が挙げられる。

この課題を念頭に置いて調査を進めていくと、この時期に実に多くの台湾に関する地誌的文献が日本で刊行されていたことに気づく。山室信一が「国民帝国」という仮説で近代日本のような国民国家と帝国との同時形成過程にある国家とその世界体系を捉える際、国民帝国は「複数の異なった政治社会を結び合わせる空間統合による広域秩序の形成」であるとし、本国の境界確定、また取得した空間範域をいかに統治地域内に取り込んでいくかということについての認識が必要だと指摘しているが<sup>4</sup>、この時期に地誌的文献が多く世に問うた背後にもこのような需要があり、また帝国として拡大を辿っていく過程において、地誌的文献の生産・流通・消費も日本国民の新しい領土への想像で重要な役割を果たしたと考えられる。

そのなかで、台湾住民の主体たる漢人をめぐってはどうか。台湾領有が決定し、実際に台湾を接収・征服するとなると、日本人は、台湾住民の主体は漢人であることを改めて思い知らされることになり、多くの文献で確認される「移住支那人」とそれに類する表記がさすものとは一体どのような人々で、またその人間集団としての特徴は何かということを変更して再認識しなければならなかったはずである。

日本の台湾統治は、50年にわたる長期的な過程だった。そもそも、他者認識とは、出会いのもとで触発され、そして継続的な交流のなかで積み重ねられていくものであるが、その源頭となるものを明らかにすることは、そういった認識の変化を辿るうえでは不可欠だと考える。

本稿では、まず先行研究に基づいて江戸時代から領有以前にかけた日本の台湾漢人認識を概観し、次に領有初期における地誌的文献を中心に主要的なものを列挙し、そこで台湾の住民が如何に表象されたかについて漢人に焦点を置きながら考察を行う。こうした作業を通して、帝国の新しい領土の位置や空間など、地理的知識として日本国民に紹介される際、そこに住む人々の存在はどのような位置づけだったか、またそこにどのような課題が存在したかといったことが解明されると考える。

---

4 山室信一「国民帝国・日本の形成と空間知」、山室信一編『「帝国」日本の学知 第8巻 空間形成と世界認識』岩波書店、2006年10月所収、20-21頁。

## 第1節 江戸時代～明治初年の台湾情報における漢人

### 1. 台湾出兵以前

台湾は日本の最初かつ統治期間が最長の植民地であったが、近代日本の帝国主義的展開において、朝鮮半島に比べれば、全体として台湾の領有や支配については必ずしも主要な命題として認識されていなかったという見方がある<sup>5</sup>。確かに、台湾出兵をとってみても、明治政府は琉球藩民の台湾遭難事件により台湾へ関心を持ち始め、この事件がのちに明治7年に起きた明治国家最初の海外派兵である台湾出兵にもつながったが<sup>6</sup>、そもそも台湾出兵の主要目的は「蕃地」問罪にあり、たとえ属地植民も考えられていたとしても、むしろ清国との妥結により撤兵したという事実のほうが重視すべきである。さらに、台湾の割譲を決めたのは日清戦争だが、戦争自体は台湾領有を目的に勃発したものでなかった<sup>7</sup>。

しかし、とはいえ、日本は台湾に対して大きな関心を示さなかったわけではなく、幕末に「台湾領有論」という思想が根強く存在し、またその素地は近世の日本においてすでに形成されていた。つまり「台湾領有」は日清戦争による思いもよらない結果ではないのである<sup>8</sup>。

このような台湾領有論の背後には、実に江戸時代から台湾出兵まで積み重ねられてきた情報や認識の軌跡がある。江戸時代の1639（寛永16）年、幕府がポルトガル船の来航と日本人の海外渡航を禁止し、海外との貿易活動を松前口、対馬口、長崎口、薩摩口の四つに限定していたが、なかでも長崎が幕府の直轄地としてその任務が最も重要だった。こうして長崎には、中国やオランダ、ま

5 例えば、マーク・ピーティーは著書では朝鮮を日本の帝国主義の始点とみており、日本の開国以来、少数の武士らが台湾を征服の対象としていたが、そのような意見を幕府が無視し、台湾出兵という「疑いなく中国の領土に対する侵略」も台湾本島の僻地の海岸に限定され、またすぐに撤兵されたため、日本の帝国主義的進出とみなせないとしている。マーク・ピーティー著、浅野豊美訳『植民地 20世紀日本 帝国50年の興亡』慈学舎、2012年、45頁。また、アンドルー・ゴードンも、日本の1870年代と80年代における対外活動で、もっとも重要な焦点は朝鮮半島だと指摘している。アンドルー・ゴードン著、森谷文昭訳『日本の200年 徳川時代から現代まで 新版』（上）みすず書房、2013年、244頁。

6 安岡昭男「明治前期官辺の台湾論策」『沖縄文化研究』第16号、1990年、353-354頁。

7 同上論文、372頁。

8 松永正義「台湾領有論の系譜——一八七四（明治七）年の台湾出兵を中心に——」、松永正義著『台湾を考えるむずかしさ』研文出版、2008年所収、231-233頁。

た東アジア各地から様々な情報が「風説書」を通して持たれてきた。台湾に関しては、鄭成功の「排清復明」・交易の活動や台湾で起った反乱に関する情報などが数多く伝来したが、幕府への上書であった『華夷変態』（林鶯峰・林鳳岡、1732）や『通航一覽』（林復齋、1853）、及び市井に流布していた『華夷通商考』（西川如見、1695）、『和漢三才図会』（寺島良安、1712）、『長崎夜話草』（西川如見、1720）、『紅毛雑話』（森島中良、1787）、『万国新話』（北山寒巖、1790）、『西洋紀聞』（新井白石、1715完成、1809より広く流布）といった文献では、台湾の戦乱、国名や行政機構の変遷、唐人の人口変動、産物が伝えられ、また僅かながら先住民族の情報も見られた<sup>9</sup>。こうした風説書や文献が伝えた台湾情報は、事件直後のわりに質の高いものであり<sup>10</sup>、常に国姓爺イメージに引きずられながらも案外正確に伝わっていた<sup>11</sup>。

ただ、具体的に後の川口長孺による『台湾割拠志』（1822年）や『台湾鄭氏紀事』（1828年）にも反映されているように、そうした歴史の記述は漢人に関するものがあっても、鄭成功などの英雄的人物や朱一貴などの反乱人物が主役とされ、また事件の記述が中心となり、清朝の官僚が記した文献において「閩」・「客」の省民集団による「械闘」が挙げられているように事件の遠因までは詳しく述べられていない<sup>12</sup>。つまり、漢人の存在は中国大陆からの移民について言及されているが、台湾住民の主体として自明のようにみなされているのみで、これら英雄や反乱人物以外の、名のない民衆たち、すなわち集団としての漢人移民の顔、その人間集団としての構成や性質などは必ずしも明瞭であったといえないのである。

## 2. 台湾出兵以降

さて、近代日本の台湾認識について、松永の言葉を借りていうならば「台湾出兵と日清戦争による台湾領有との間には、樺山資紀、水野遵を始めとする人

9 田中梓都美「台湾情報から台湾認識へー江戸幕府の収集した台湾情報と人々の台湾認識ー」『東アジア文化交渉研究』第4号、2011年3月、468-476頁。

10 松浦章『海外情報からみる東アジアー唐船風説書の世界』清文堂、2009年、271頁。

11 松永正義、前掲論文、247-251頁。

12 松浦章の1832（道光12）年における嘉義・張丙の乱に対する考察によれば、清朝の官僚周凱の「記台湾張丙之乱」のように遠因が「械闘」が挙げられているのに対し、『天保雑記』に記録される情報は正確に伝えられているものの簡潔な記述にとどまることが確認される。松浦章『海外情報からみる東アジアー唐船風説書の世界』清文堂、2009年、241-242頁。

的つながりがあったばかりでなく、領有論やその後の植民地化過程を支えた日本人の台湾イメージそのものが、台湾出兵によって生みだされ、あるいは拡大された<sup>13</sup>とされるように、1874年の台湾出兵により大きな転換期を迎えることになった。それ以前の台湾認識において、先住民に関する記述は関心が薄く僅かなものだったが、この時期の関心は先住民に集中されていることが特徴として指摘できる<sup>14</sup>。

例えば、台湾出兵時に第一線に立った樺山資紀の「日記」や水野遵の著作である「台湾征蕃記」では、先住民の部落・風俗などについて詳細な記述がみられるものの、漢人（清国人）に関しては記述が少なく、先住民へ圧迫を加えた人々としての観察が多い<sup>15</sup>。

そして、すでに多くの研究に指摘される通り、何よりも台湾出兵が日本メディアの発展のきっかけとなり、また関連報道を通して日本人の台湾認識にインパクトを与えた。当時はまさに日刊新聞の誕生期であり、1870（明治3）年に最初の日本語日刊新聞『横浜毎日新聞』が創刊され、また1872年に東京最初の日刊新聞『東京日日新聞』（以下、『東日』）が発刊された。『東日』は台湾出兵時の活動をきっかけに日本の新聞界で主導的な役割を担うようになった。何より『東日』の従軍記者として出兵へ参加した岸田吟香の役割が重要である<sup>16</sup>。

『東日』では1874年から「錦絵新聞」が発行され、流行した時期は1874年から1881年までだったが、台湾出兵は実にその流行を後押ししたのである<sup>17</sup>。『東日』での表象をみると、岸田吟香の報道観念は大新聞を読むエリート層向けであることに対し、錦絵新聞を制作する側は民衆の嗜好に合わせている<sup>18</sup>。そして、岸田吟香の新聞挿絵は忠実であるが、錦絵新聞は対比を漂わせている。台

13 松永正義、前掲論文、233頁。

14 田中梓都美「牡丹社事件を契機とする日本人の台湾認識の変化」『史泉』第114号、2011年7月、15-29頁。

15 林呈蓉「樺山資紀「日記」與水野遵「臺灣征蕃記」的史料價值與意義」『臺灣史料研究』第20期、2003年3月、159-160頁。

16 團藤充己「台湾出兵と『東京日日新聞』：「報道」と「言論」の両側面から」『メディア史研究』第33号、2013年、59頁。

17 山本芳美「明治初期の新聞錦絵とかわら版にみる牡丹社事件—想像された台湾出兵と台湾原住民族」、日本順益台湾原住民族研究会編『台湾原住民族研究の射程—接合される過去と現在』風響社、2014年6月所収、248頁。

18 大谷正「メディアの伝える戦争—台湾出兵・西南戦争・日清戦争（第10回歴史学入門講座）」『宮城歴史科学研究』第63・64号、2009年、42-61頁。

湾出兵に関する錦絵新聞は10点ほどあるが、そのなかで現地の住民を描いたものは736号（岸田吟香を担いで川を渡ろうとする現地人を描いたもの）、753号（日本兵の足下に土下座して帰順を示す蕃族を描いたもの）、726号（日本軍に保護された「牡丹少女」を描いたもの）の3点だが、洋服姿の日本人と野蛮な現地人という「文明対野蛮」の対比が、記事そのものよりも鮮明である<sup>19</sup>。なお、漢人が描かれたのは736号のみである。



図1 落合芳幾「東京日日新聞錦絵新聞」第736号 1874（明治7）年

一方、1874年に発行されていた主要な新聞、すなわち『東日』、『横浜毎日新聞』、『日新真事誌』、『新聞雑誌』、『公文通誌』（後に『朝野新聞』）、『郵便報知新聞』、『読売新聞』を中心に当時台湾をめぐるどのように表現されたかは陳萱も検討しており<sup>20</sup>、台湾出兵により日本の台湾への注目はその焦点が変化し、それまで、日本人の台湾イメージでは先住民の存在が薄かったが、これらの新聞メディアでは先住民について様々な側面から描写されたと分析している<sup>21</sup>。また、例えば『征蛮医誌』のような文献でも、「支那流民」や「清国漢人」な

19 土屋礼子「台湾出兵と日本のメディア」『アジア遊学』第54号、2003年8月、82頁。

20 陳萱『明治日本における台湾像の形成—新聞メディアによる1874年「台湾事件」の表象—』台北市、國立臺灣大學出版中心、2013年、61頁。



ど、漢人に関する記述があるが、こういった人々の構成や言語習慣などに関しては大して注目を払われなかった<sup>22</sup>ことからわかるように、先住民とは対照的に漢人への関心度は副次的ともいえる。

以上述べたことを本稿の問題意識に関連付けると、江戸時代の文献により、台湾という島に「華人」や「唐人」という中国大陸からの移住民が居住しているという情報が日本に伝えられていたが、総じていえば英雄や反乱人物が叙述の中心となっており、詳しいものとは言い難い。また台湾出兵の時期になると、むしろ先住民の居住地域や人文的特徴のほうに関心が寄せられ、漢人に関する記述は脇役的・従属的と指摘することができる。松永はかつて台湾出兵が日本人の台湾イメージに与えた影響として、第一に台湾東部は清朝の主権外にあるという考え方、第二に台湾＝高山族＝野蛮→漢人への不当な軽視という連想のパターン、第三に台湾＝病気という連想パターン、最後に中国に対する蔑視感といった点を指摘していたが<sup>23</sup>、まさに漢人はこの時期に軽視される側面があるのである。このような認識の枠組みは、日本の台湾領有が決まった時期まで続いたと思われるが、それ以降は台湾の住民全体と直接的に関わることから変化することになった。

## 第2節 領有前後における地誌的文献の出版

### 1. 出版の背景

1894年に日本と清朝の間に日清戦争が起きたが、1895年に日本の勝利を確認した日清講和の結果を受け、台湾が日本に割譲された。そもそも、日本の勝利は、明治維新以降の改革が成功し、帝国主義国としての資格が証明される象徴的な出来事だった。そして、下関条約による台湾とその付随島嶼といった新しい領土の取得が、植民地帝国への幕開けということの意味した。国民帝国として、領土の拡大について国民に認識を促すことは重要だが、そこに住む人々に関しても捨象してはならない。先に述べたように、台湾出兵の時期において、台湾住民への関心は先住民に集中していたが、領有当初の台湾住民に投げかけられた視線は如何なものだったのだろうか。

領有初期において、日本の台湾領有は拓殖に専念すべき、住民の去就は放任

21 同上書、99-100頁。

22 落合泰蔵編纂『明治七年征蛮医誌』台北、1885年、11頁、40-41頁。

23 松永正義、前掲論文、263-268頁。

すればいいという統治策論は福沢諭吉が主宰する『時事新報』に見られ、そこには漢人の存在は認めるが、その統治は副次的な目標であるという姿勢がうかがえる<sup>24</sup>。しかし、実際の統治になると、住民対処の問題は回避できず、なかでも主体たる漢人の問題は見過ごすわけにはいかなかった。

1895年に下関条約をめぐる交渉の最中に、清国の欽差頭等全権大臣・李鴻章は日本の全権弁理大臣・伊藤博文に「台湾係潮州、漳、泉及客家所遷往、最為強悍」と伝えたが、このことは台湾の在来住民の主体、すなわち漢人について、その関連知識がまだ日本の指導者の間で形成されていないとも読み取れるだろう<sup>25</sup>。この時期に台湾関連の地誌的文献の大量刊行・流通は、むしろこのような現象を物語っているのである。

## 2. 主要な地誌的文献

以下、本節では、台湾漢人という民族の構成や性質・特徴について分析に値する内容が記され、また本稿で検討する主要な文献を、その著者や趣旨・構成などを紹介しながら示しておく。なお、本稿で挙げる地誌的文献は、広く学術性の高いものや、軍関係の報告書、加えて民間に出版された一般人向けの書物も含む。その中で主要7冊をあげ後に詳しく検討する。

日清戦争がなお進行中の1894年に、足立栗園<sup>26</sup>の『台湾誌』（以下、『台湾誌』（足立））が出版された。足立はこの時期に日本弘道会で編輯主任を務め、『東洋倫理大綱』、『国民の新修養』などの著作を残した思想家であるが、日清戦争の終盤に出版された本書は、戦争の画期的な意味を強く意識している。緒論では、「東洋」が西洋の侵略を蒙るという時局において、なお「邦を為すもの」は、日本・「支那」・朝鮮のみであるが、「此三者の中、尚迷想宇内の大局に眼

24 社説『時事新報』、1895年4月20日。楊素霞「日治初期臺灣統治政策論的再考—以《時事新報》對漢人統治與拓殖務省問題的討論為中心」『亞太研究論壇』第33期、2006年9月、128頁。

25 臺灣銀行經濟研究室編『馬關議和中之伊李問答』文叢第43種、1959年、17頁。

26 足立栗園は1868（明治元）年11月に京都府福知山に生れ、1882年に福知山の小学校高等科を卒業後、京都市にて漢学、数学などを修めながら、1889年まで小学校の教員を勤めていた。1890年より東京英語学校及び文学院にて英学を修業し、明治25年より「栗園」と号し多くの新聞雑誌に寄書していた。1896年に東京帝国大学史料編纂掛助員を勤め、1902年に日本弘道会編輯主任になった。1923（大正12）年の退任後も著述活動を続けており、1935（昭和10）年に死去。「故足立栗園氏の略歴及絶筆」『弘道』第514号、日本弘道会、1935年3月、71-72頁。



を注ぐ能はずといふもの」があり、それを反映した朝鮮問題をめぐって日清戦争が始まったが、戦争の最終の目的は東洋の平和を永遠に保持することにあり、朝鮮問題はその企てに達するための媒介者にすぎないと説いている<sup>27</sup>。さらに、東洋の平和を維持するのに日本を強国にする必要性をも次のように語っている。

東洋の平和を維持し、東亜をして宇内に強邦を作らしむるものは実にこの日本を隆ならしむるより他あらず、而して今の時に於て此日本をして隆ならしむるものは早く其地位を作らしむるに如くはなし、台湾島の問題茲に於て乎来る<sup>28</sup>。

また、出版目的として「台湾の地理を詳説せんとはあらず、其地古来の沿革を原ね下らんと欲してなりき、されど歴史の事を攷ふるに方りては、先づ其地理の概要を了せざるべからず」<sup>29</sup>とあるように、第一編の「地理」と第二編の「歴史」で構成されている。歴史編においては、上世紀の海賊時代・中世紀の鄭氏時代・近世紀の清属時代に分かれており、各時代の主要人物と事件が述べられているため、歴史中心の文献ということがうかがえるが、地理を紹介する部分、すなわち第二章「風習沿革」の内容に台湾住民の構成も含まれている。

なお、引用書や参考書として、『清史攬要』、『台湾風土記』、『台湾志略』、『台湾外記』、『台湾鄭氏紀事』、『明清關記』、『野史』、『華夷変態』、『明朝紀事本末』、『南疆譯史勘本』、『明史』、『武備志』、『外交志稿』、『江南経略』、『東亜各港志』、『清佛戦争記』、『南海治乱記』、『清佛戦争記』、『征台記事』、『明治政史』、『大日本商業史』、『世界に於ける日本人』、『東邦協会報告』、『地学協会報告』、『都名所図絵』、『清史攬要』といった日本や中国などで出版された書物が挙げられている<sup>30</sup>。

1895年1月に『台湾誌』（以下、『台湾誌』（参謀）が参謀本部より完成した。参謀本部は1878年に発足したが、活動の一つとして、軍人を隠密探偵として民間人に装わせ、中国や朝鮮に派遣し地図や地誌の作製に携わらせていた。『台湾誌』（1895）は『朝鮮地誌略』（1888）、『支那地誌』（1889）などに並ぶ地誌の調査の成果の一つであったが、そもそも、アジアでのフィールドワークが島

27 足立栗園『台湾志』哲学書院、1894年、序論3頁。

28 同上書、序論3-4頁。

29 同上書、1頁。

30 同上書、1-2頁。

居龍藏や伊東忠太などの研究者による本格化以前、アジア情報の収集の主要な担い手は軍人であり、基礎的な地誌の情報も軍部により作成されたのである<sup>31</sup>。具体的に、『台湾誌』（参謀）の性質は台湾が下関条約により清国より割譲されることが決まり、接収のために正式に上陸する間に、情報収集のために参謀本部により編纂された台湾の地理・気候・動植物・産業・風俗習慣などに関する報告書である。つまり、本書は国家の要請による民情研究、そして隠密による敵情視察の二面性を持ち合わせていた<sup>32</sup>。

1895年10月に出版された天野馨（寒英）の『地理風俗台湾事情』も台湾は沖縄に取って代わって「南門の鎖鑰」、すなわち形勢上は枢要地になるなどとして、台湾の地勢、山川、都府、湾港、人情、風俗、産物などを詳細に説明する文献である<sup>33</sup>。本書は、実際に台湾を視察した人物、例えば富山県前代議士岡野善次郎の紀行談が収録されている。また、台北、基隆、台南、澎湖といった各地の情報も記載されている。

1896年2月に日本初の本格的な台湾研究書と評される『台湾諸島誌』が東京地学協会から刊行された。本書は台湾領有後の内外の資料を渉猟して著わされたものだが<sup>34</sup>、中国史書や欧米の人文地理学の研究成果も取り入れられ、福沢諭吉からも高い評価を受けていたという<sup>35</sup>。著者の小川琢治<sup>36</sup>は、明治日本において中国の歴史地理学・地図学史という研究分野の草分けといわれ、東京大学の地質学科に在籍中、農商務省の外郭団体であった東京地学協会より台湾の割譲が決定したという需要で、その師の一人である神保小虎理科大学教授が編纂の依頼を受けて、さらに小川がその編纂実務を担い本書を著した<sup>37</sup>。著述の

31 山室信一、前掲論文、30-31、35頁。

32 山路勝彦、前掲書、18頁。

33 上原関洲「叙」、天野馨（寒英）『地理風俗台湾事情』大川屋、1895年10月、1-2頁。

34 山路勝彦、前掲書、18頁。

35 山室信一、前掲論文、38頁。

36 小川琢治は中国に関する歴史地理学・地図学史という研究分野の草分けである。1908（明治41）年に京都大学に新設された地理学講座で教授となった。小川の研究は、日露戦争の際に満洲で地質調査を行うや、朝鮮で「間島」調査に当たるなど、日本のアジア進出と関わっていた。1931（昭和6）年の満洲事変時、『中華民国及満洲国』の境域などを監修し、日中戦争時の1939年に『戦争地理学研究』を刊行した。また、小川琢治の次男は東洋史学の貝塚茂樹、三男はノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹、四男は中国文学の小川環樹である。山室信一『近現代アジアをめぐる思想連鎖 アジアびとの風姿——環地方学の試み』人文書院、2017年4月、120頁。

際に中国の「方志」の利用方法を学び、自然科学としての地質学とを融合させ、「史学地理学」という学問に発展させたという<sup>38</sup>。その編纂期間はわずか七ヶ月と推測されるが、小川個人の力量、そして同時期に同著の右に出る類書がなかったことから<sup>39</sup>、売れ行きがよく世評も高かったという<sup>40</sup>。

1896年4月に刊行された『台湾実況』は従軍記者の権藤震二<sup>41</sup>による著書である。本書はおそらく1895年に当時の『毎日新聞』の記者特派員として光永星郎と一緒に台湾へ赴いた<sup>42</sup>ときの見聞であり、また巻頭には当時の民政局長水野遵の題字と中部都督部参謀長の鮫島重雄の題歌があり、お墨付きという意図が見受けられる。序言では、権藤は自ら遼東半島より軍と一緒に台湾北端の三貂角に上陸し、南端の打狗より帰船に搭したという経験を述べ、自分は台湾に七ヶ月も滞在していたため、「台湾実況」も夢想の空言ではないことを示しているが、台湾滞在時は「干戈落々固より調査攻究に違あらず」の事情があり、欠を補うために史誌の記載をも参照したと説明している。このように、「今疑わしきを挙げて之を闕けり」、また「著者の実見踏査にあらざるを示めせり」することにより、「読者を誤らざる」や「自ら欺かざる」と自らの姿勢をアピールしている。また、本書の目的は「世人が台湾に対する大誤謬」を正すた

37 小川琢治『一地理学者之生涯』1941年12月、小川芳樹。岡田俊裕「小川琢治」『日本地理学人物事典〔近代編1〕』原書房、2011年12月、184-195頁。

38 山室信一、前掲書、1120頁。

39 戴国輝「日本の植民地支配と台湾客家」、春山明哲他編『戴国輝著作選1 客家・華僑・台湾・中国』みやび出版、2011年4月所収、148-149頁。

40 小川琢治、前掲『一地理学者之生涯』45頁。

41 権藤震二は1871（明治4）年福岡県久留米市生まれ、18歳の頃に「儒学の大体に通じ、詩文を善くす」、成人して上京したが、1893年に専修学校を卒業し、毎日新聞に入社。「流暢の筆を揮ってよく深遠なる識見を披瀝し、名声噴々、普く一世の胆望するところとなる。」また、日清戦争では従軍記者として活躍し、「靈妙の筆よく機微を伝うる迅速」と評価されている。その後、富山日報、北国新聞の主筆を経て、二六新報に入り、さらに1901年におそらく従軍記者時代に知り合った光永星郎と電報通信社（電通の前身）を設立し、のちに「シーメンス事件」で失脚してしまうが、1911年には電報通信社のスター的存在だった。また、権藤も日露戦争の際に長田秋濤にロシアのスパイを意味する「露探」と指摘したことも挙げられている。『実業家人名辞典』1911年。『八火伝』電通。岡本慶一「広告的知の考古学第一回 忘れられた創業者——権藤震二」『日経広告手帖』第47巻第13号、2003年10月、42-43頁。稲村徹元他編『大正過去帳〈物故人名辞典〉』東京美術、1973年5月。奥武則『露探：日露戦争期のメディアと国民意識』中央公論新社、2007年8月、32-47頁。

42 『電通一〇〇年史』電通、2001年。

めだが、「自家の小誤謬」もあり、後日完全なる記述が世に出れば、本書は一炬に付すべきと不足を認めている<sup>43</sup>。ちなみに、台湾の住民について、第三章「住民」と第四章「政教及習俗」に記述がある。

1897年2月に春陽堂より出版された『台湾事情』は松島剛<sup>44</sup>、佐藤宏の著作である。序文では、台湾は日本の版図に帰してから、二年が経ったが、「然るに其形勢未だ我国人一般に知悉せられず或は外国の観をなし」ているため、「台湾を新領地として疎外するの弊を除き本土と同一の観」にさせるべく、「昨年来より徐々材料を蒐集して、本書の編纂に着手し始め」た所以である。従来参考材料は「多くは雑駁にして、臆裁の整頓したるものなく、或は局部の観察に止り、或は専門の学術的研究に出て其の然らざるものは旅行者探験者等の物」であり、「断翰零墨に過ぎ」ず、「参考の資に供すへきもの甚だ尠」くないという問題があるため、「可及的完全なる書」を目指したいという立場を表明している<sup>45</sup>。

また、参考文献を明示しており<sup>46</sup>、また不完全なものであると認めつつも、「台湾の事情を我邦人に紹介せんと欲するの急なる終に鉛槧に附する事となり、最後には今年末日本本土の大学などより幾多の専門家が台湾事情の調査に

43 権藤震二『台湾実況』東京法学社、1896年4月、序言五則1-2頁。

44 松島剛（1854-1940）は和歌山藩士の子として江戸に生まれ、幼少期は漢学、フランス語を学び、18歳以降は共慣義塾、勸学義塾、河泉学校、慶応義塾で英語学を学んだあと、私塾の経営を経て1884（明治17）年以降茨城第一中学校一等教諭、私立埼玉英和学校校長、東京英和学校教授を歴任した。日本地理を詳しく知る必要があるということで自ら述作に向かい、1891年に『近世地理学』を刊行した。1897年に青山学院教授を辞任後、同学院の理事となり、1897年から赤坂区議員、1901～1907年に東京市議員に選ばれた東京市議員の経歴をもつ明治期日本の教育者であり、人文地理学の立場から初期の地理教育に貢献した人物である。内藤堯「日本地理学者伝 地理書著作の先駆者 松島剛氏」『地理学研究』第3巻第11号、1926年。藤田東一郎「松島剛自筆の経歴」『伝記』第7巻第8・9合併号、1940年。倉長真「松島剛年譜」『英学史研究』第1号、1969年。岡田俊裕「松島剛」『日本地理学人物事典〔近代編1〕』原書房、2011年12月、60-69頁。

45 松島剛、佐藤宏『台湾事情』春陽堂、1897年2月、序1。

46 具体的に、『台湾』（民友社）、『台湾』（黒谷了太郎）、『台湾志』（足立栗園）、『台湾誌』（参謀本部）、『台湾地誌』（服部誠一）、『台湾諸島誌』（小川琢治）、『台湾実業地誌』（安東不二雄）、『新領地台湾島』（素堂学人）、『台湾外記』、『台湾風土記』、『台湾志略』、『征台記事』などの書物と東邦協会の報告・『地学雑誌』などが明示され、さらに『台湾島全図』（参謀本部出版）、『台湾島之図』（水路部出版）、『台湾諸島全図』（地学協会出版）、『台湾諸島地名表』（山吉盛義編纂）などの地図が挙げられている。松島剛、佐藤宏、前掲書、序1-2頁。

派遣されるため、台湾形勢が一層明瞭となるという期待も付言している<sup>47</sup>。

なお、内容の充実さは章節からも伺える<sup>48</sup>。漢人について特設した章がないが、第六章の「人種」で詳しく述べられており、またその風習・文化、そして先住民との関係などは各章に散見される。

ちなみに、章名にあり、またこの時期の文献にも多く見られる「人種」という表現について、日本では、「人種」と「民族」は長きに渡り対比的な意味をもつ意味用語として了解され、前者は生物学的な観点からの分類法であるのに対し、後者は文化の観点に基づく区分という使い分けがなされていた。しかし、草創期の日本人類学において、自然人類学と文化人類学の分化はまだ進んでおらず、「日本人種」、「大和人種」といった言葉やEthnology = 「人種学」などからもわかるように、「人種」は文化・言語による分類という意味合いをも含んでいた。「人種」と「民族」の現在に近い意味合いへの定着は、大正期以降のことであったため<sup>49</sup>、本稿の検討文献に現れる「人種」という表現も、「民族」に近い意味として理解できよう。

最後に、1899年に出版された村上玉吉の『台湾紀要』をも検討する。村上は、最初は従軍という形で台湾へ赴き、「土匪」討伐にも参加し、のちに新聞記者として台湾で長年活動していた<sup>50</sup>。本書は、当時民政長官を務める後藤新平から推薦の序文を受けたことが一つの特徴である。その序文には、「台湾の我版図に帰して以来同島に関する著書の世に出つるもの汗牛充棟も畜ならず」とも

47 松島剛、佐藤宏、前掲書、序3-4頁。

48 第一章「歴史」、第二章「地理」、第三章「地質」、第四章「植物」、第五章「動物」、第六章「人種」、第七章「熟蕃」、第八章「生蕃」、第九章「頭顱獵」、第十章「宗教」、第十一章「社会生活一斑」、第十二章「産物」、第十三章「輸出入」の外に続編もあり、続編は第一章「マツケー氏の台湾伝道」、第二章「支那人間の布教」、第三章「蕃人間の布教」、第四章「仏人来」、第五章「社会的事業」がある。

49 坂野徹「科学研究と人種概念—人種・民族・人種主義」、坂野徹・竹沢泰子編『人種神話を解体する2 科学と社会の知』東京大学出版会、2016年11月所収、5-7頁。

50 村上玉吉は1895年に渡台し、以降「台北日報」の主筆や「台湾日日新報」の社会部長、台南支局長を歴任し、「討蕃五年計画」にも記者として参加した。文学界でも活動し『台湾風俗写真帖』の編纂発行、『台湾文芸』の発行にも携わった。実業界に入って台湾漁業会社専務取締役などを歴任し、また台南では、台南商工会の常任幹事、台南公会の副会長、市協議会員と州会議員をも務めていた。台湾文化三百年記念会にも関わり、『南部台湾誌』など台湾関係の著作十数種を公刊していた。住屋三郎兵衛「台南市事業界の元老格」『台湾人物展望』台湾月旦社、高雄市、1932年6月、54頁。村上玉吉「自己を語る」『親民』第4巻第4号、1939年9月、34-35頁。

多くは杜撰粗漏の報告又も在来の旧書を根拠とせしものにして未嘗て实地踏査の結果に成れるもの尠きを憾みんとせずんはあらず」と記されていたものの、村上はかつて原田少将に従って軍人として台湾に赴いたという経験から、「其実状を描写し加ふるに幾多の著書を参照し」、「未だ完璧と称する能はずと雖も」、やはり「彼の机上空論の書に勝る」と評価している<sup>51</sup>。

一方、村上自身も著作ではそれまでの文献と同様に新領土台湾を知る必要性を示しながらも、「憾ムラクハ未ダ余ヲシテ満足セシメタルモノ一モ之レアラザリキ」と指摘している。また、「多数先輩ノ著述中ニハ材料該博議論明確以テ遺憾ヲ存セザルガ如キモノナキニアラザリシカドモ如何セシ此等著述ノ概シテハ或ル一方ノ事ニ密ニシテ他ノ一方ノ事ニ粗ナルヲ免レズ為メニ全般ノ事情ヲ知ルニ由ナク寔ニ隔靴搔痒ノ感ナキ能ハズ」としながら、その理由は下記のように書かれている。

此等先輩ノ著述ハ単に材料ヲ内外ノ古文書而已ニ採リ之レヲ纂訳敷衍シタルニ止マルモノ多キニ居リ嘗テ一度モ足ヲ実地ニ容タル事ナキヲ以テ附会臆測ノ通弊ヲ生シ漸ク該島ノ實際ニ遠カリ文字遂ニ疎闊ヲ免レズ稀ニ其然ヲザルモノアリトスルモ観察ノ着眼点総テ清政府当時ノ台湾ヲ直写スルニ勉メ今日ノ台湾ヲ度外ニ措キ筆ノ茲ニ及ビタルモノ<sup>52</sup>

こうした欠陥に対し、村上は自ら「駐台三年 自明治二十八年九月至同三十一年一月ノ実験ニ徴シ類集彙纂シタルモノ既ニ数十百枚ニ達シ」、さらに『台湾紀要』が完成に近い頃には、「陸軍少将原田良太郎閣下ノ台湾巡視ニ随従スルノ榮ヲ荷ヒ本年三月中旬ヨリ五月中旬迄ノ間ニ於テ周ク全島ヲ巡検シ更ニ实地材料ヲ得テ」、また「此巡台中ニ於テ在台中第九憲兵隊本部山田敬哉君ノ旧志ニ関スル材料ノ供給ヲ受ケ又台湾各地ニ於ケル知已諸彦ノ賛助スル処トナリ調査ニ直接ニ間接ニ便宜ヲ与ヘヲレタル」と具体的な事項を並べて『台湾紀要』の特徴や長所は台湾での实地視察にあることをアピールしている<sup>53</sup>。

『台湾紀要』の構成は充実しており<sup>54</sup>、漢人については第三編「人文」の第一章「人種、人口、族制」・第二章「食物、家屋、衣服、風俗」・第三章「国語、

51 後藤新平「序」、村上玉吉『台湾紀要』警眼社、1899年。

52 村上玉吉「緒言」、村上玉吉、前掲書、1-2頁。

53 同上書、2-3頁。



宗教、教育、文事、美術、衛生」といった章で触られている。

以上挙げてきたのは、さらに後述にてその内容を詳しく検討する主要な文献である。なお、そのほかの文献についてここで簡単に述べたい。1895年に刊行された文献の中で、住民関連の記述はあるが、その描写は明らかに先住民のほうに傾いているものがある。1895年2月に民友社から出版された『台湾』はその一つである。これはその参考文献は主として水野遵の台湾征服に関わった際に集めた史料に依拠していることにも関係しているが<sup>55</sup>、焦点を集中させるために本稿では除外することにする。また、1895年6月に出版された素堂学人の『新領地台湾島』は、『台湾誌』（参謀）からの引用が明らかに多いので、同じ考察の範囲外とする<sup>56</sup>。さらに、同じ時期に黒谷了太郎より『台湾』が出版されたが、黒谷自身が書いた緒言にある「本書ハ永く同島ニ滞在セル英国領事アレキシス・ホーシー氏ガ一八九三（明治二十六）年英国々会両院ニ提出セシ報告ヲ翻訳セルモノ」とあるように、本書は黒谷の著作ではなく、その訳書であ

54 構成としては、第一編「総説」（第一章「台湾の名称」、第二章「台湾人の脳裡に描かれし日本」、第三章「歴史的沿革」、第四章「日清講和條約原文」）第二編「天然」（第一章「位置 広袤 区分 地勢」、第二章「海岸 沿海 港湾 海深 島嶼」、第三章「潮汐 海流」、第四章「山脈 山岳 火山」、第五章「平野 未開平原」、第六章「河湖 瀑布」、第七章「鑛泉 地震」、第八章「氣候 風等」、第九章「動物 植物」）第三編「人文」（第一章「人種 人口 族制」、第二章「食物 家屋 衣服 風俗」、第三章「国語 宗教 教育 文事 美術 衛生」、第四章「土地 農産 畜産 林産 水産 鑛産附地質 工業 商業附貨幣度量衡」、第五章「交通航海道路郵便 電信」、第六章「政治 軍備」）第四編「邦制」（第一章「北路」、第二章「中路」、第三章「南路」、第四章「東海岸」、第五章「属島」、第六章「蕃地」）第五編「雑録」（第一章「文書」、第二章「志料」となっている。

55 垣田純朗『台湾』民友社、1895年2月、3頁。例えば、本文献では、漢人が多く住む台湾の西部を紹介する「其三 西部台湾の施政及び宗教」では、清朝の諸統治制度と宗教が紹介されているが、漢人の民族性質に関しては触られていない。これに対し、「其四 東部台湾」では、「其東部一帯に至ては全く生蕃人の住居」と先住民の地域として比較的詳しく紹介され、こちらでは「支那人」について触られているが、「斯くて支那人の来りて日に其領土を覺むるや、彼等は深く之を仇敵視し、支那人を見れば直ちに其首級を得るを以て名譽の事と」するなど、マイナスなイメージとして描かれている。なお、平野部の先住民「熟蕃」は「多くは閩粵の流民にして、支那人と生蕃との間にあり、北より南に至る多くの繁栄なる村落を打ち建てり」とされているが、ここでも「支那人は常に彼等を野蛮人と称すと雖、彼等は曾て偽詐盜奪争訟をなすを聞かず、又常に公平にして慈心あり」など、「支那人」の悪い一面が描かれている。

56 素堂学人『新領地台湾島』今古堂、1895年6月。

り、また記述も先住民に集中しているため<sup>57</sup>、上記と同様な扱いとする。

加えて、伊藤紫微散人・岩崎好正編『台湾事情』（巖々堂、1895年）など歴史叙述中心の文献があるが、本稿ではその分析を捨象する。なぜなら、歴史のなかの主体として漢人は確かに役割を果たしていたが、そこに鄭成功や蔡牽などの英雄の人物に付いて行動する人々として描かれ、エスニックグループや人間集団としての性格や特徴は浮き彫りになるものでなく、逆に台湾地理全般を扱った地誌的文献では、人口や種族などのカテゴリで分析のなかで民族集団の性質がまとめて触れられるためである。

日本の台湾領有当初における主要な地誌的文献は台湾の事情を詳細に伝えると訴えながらも、多くの文献に共通する特徴の一つは、「其地理風俗、及び現今の状態に於ては或は闕如せるものあらん」<sup>58</sup>とし、つまり台湾に関する情報が不完全ということであった。これは台湾の全貌を実地調査に基づいて把握する条件はまだ整っていないことに由来すると考えられ、またこれらの著者には、実際に台湾に赴いていなかった者も多かったのである。さらに、地誌と自称しながらも、その著者や編者は必ずしも近代的な地理学のディシプリンがなく、ただ政治的・軍事的な出来事の勃発時の地理的知の需要に応じて機敏に参入したものも多い<sup>59</sup>。

ここで、日本統治以前の台湾認識に関する状況をみると、例えば西洋宣教師は日記などを通して多くの台湾住民認識を残し、自分の宣教という立場を基準に、台湾漢人の迷信、物質主義などの特徴を見出した<sup>60</sup>。また、清朝の時代においても中国大陸からやってきた官僚や文人が地方誌や旅行記に記録が残っている。この時期における日本人の台湾住民への理解は、清朝の地方誌と西洋人の文献に頼らざるを得ない側面もあろうが<sup>61</sup>、後に述べるように、日本近世以来の認識の継承、そして領有初期の社会状況から影響を受ける部分もあった。

さらに、日本の台湾領有初期やその直前に刊行された文献に見られる特徴の

57 堀田典裕『〈山林都市〉黒谷了太郎の思想とその展開』彰国社、2012年12月、71頁。

58 足立栗園、前掲書、例言1頁。

59 この論点は、米家泰作「近代日本における朝鮮地誌の出版とその系譜」『日本地理学会発表要旨集』第100035号、2017年にも触れられている。

60 陳東昇「十九世紀後期西方傳教士對臺灣漢人的看法」『臺灣文獻』第68巻第3期、2017年09月、12頁。

61 呉文星「日治初期日人對臺灣史研究之展開」『中華民國史專題論文集第四輯』臺北市、國史館、1998年12月所収、2020頁。

もう一つは、歴史上日台関係の緊密さが強調されることである。例えば、『台湾誌』（足立）では、倭寇の活動歴史を例証に、「鎖国」時代以前における日本人の対外思想は非常に伸ばしており、冒険的事業に従事する性質があり、「実に当時に於ける台湾の地は全く我日本人民の占拠する所となり居たればなり」ということが主張されている<sup>62</sup>。反対に中国大陸との関係について、「台湾近島は明時代に於て漸く支那人の頭脳に描くものとなりしといふも不可なし、然りといへとも全然台湾本島が他国人によって占領せられ、仍つて以て其地の開拓を見るに至りしは、これ明末にして而して其人民が我日本国民なりしといふ事又一点の疑なきが如し」と、台湾と中国との関係はもともと薄いものだったと述べられている<sup>63</sup>。

この特徴の要因は、江戸時代の台湾認識から継承されている部分に当たると考えられる。松永によれば、当時台湾のことがかなり広汎に知られていたが、日本と台湾の交渉やつながりの部分は特に注目され、なかでも浜田弥兵衛と鄭成功の名は人口に膾炙していた。それにより形成されたイメージには日本人が早い段階から台湾で活躍し、そして台湾はもともと清朝に属していなかったという認識が存在し、また将来に向けて台湾は日本人が活躍して当然の土地だという考え方につながり、その上で台湾領有論が形成することとなった。また、内藤耻叟のような「台湾はもと我が所属島なり」という台湾領有論を持ち、初代の学務部長・伊沢修二へ宛てた書簡を通して台湾領有初期の教育政策に影響を与えた人物もいた<sup>64</sup>。いずれにしても、台湾は日本人が活躍していた土地であれ、もともとが日本の領土であれ、地誌の文献にみる台湾認識では、中国大陸との関係を薄め、清朝に領有された二百年間を低く評価する意図が見受けられる。

確かに、台湾という島の帰属は見方によって大きな幅があるが、清朝の統治を通して漢人を中心とした社会が確実に成立したこともまた紛れない事実である<sup>65</sup>。こうした認識の枠組みのなかで、清朝の領有により形成された社会の主役、漢人はどのような目線で見られていたのだろうか。第3節では、文献の内容を取り上げながら検討を試みたい。

62 足立栗園、前掲書、45頁。

63 同上書、20頁。

64 大浜郁子「内藤耻叟における日本の台湾領有論」『沖繩文化研究』第29号、2003年3月、409-434頁。

### 第3節 地誌的文献に伝えられる台湾漢人像

日本の台湾領有初期（直前の時期を含む）における地誌的文献は、台湾出兵の時期に比べ、全体的に漢人を中心とした記述が増えてきたことが一つの特徴として挙げられる。漢人は台湾住民の圧倒的多数であるため、このような特徴は当然といえる面もあるが、台湾出兵時の焦点が清国支配外の土地とその住民に集中していたことに対し、台湾領有が決まった後は全体的な事象を把握しなければならず、住民の主体たる漢人についても知る必要が迫ってきたということが、地誌的文献が世に問われた背景としてあったと考えられる。

では、現代の我々がいうところの台湾漢人は果たしてどのような存在として描かれていたのだろうか。その時期に編纂・出版された、いくつかの地誌的文献を取り上げ、その編著者や編纂・出版の目的などの情報をふまえながら、住民に関する記述に特化して述べていく。

#### 1. 住民全体における「移住支那人」

本項では、まず住民全体の構成、その呼称、または相互関係から、台湾住民全体における漢人の位置づけについて見てみたい。

『台湾志』（足立）では、第二章「風習沿革」において関連記述があるが、ここでは台湾の住民全体は「土蕃」・「土民」・「清（国）人」に分けられている。その内容を見ると、「土蕃」とは、台湾の「山岳の地及び東方」に暮らす人種をさすが、その風俗は「概して頑愚粗暴の状態にして、此処彼処に離合集散して、常に争鬪を事とし甚だしきは間々人を屠て食ふものあり、特に清人を敵視すること甚だしければ常に之を殺戮し、其頭を豕尾と称して之を神前に供物として用ふといへり」<sup>66</sup>とされている。一方、「土民」は「西部に生活する」人々のことであり、「漸次海岸に接近する地に遷居し従つて教化を受くること大なれば自然半開化の風に移り、状貌も良柔にして、清人と協和するもの多く、而も是等は全く頑固なる土蕃と異に、海岸に住し、他国人と交ること多きを以て漸次良好に赴」いているとされている。なお、この当時山岳部の先住民に対する知識まだ乏しいという事情が反映されているためか、各地域の「土民」の性

65 若林正文は「台湾史では、清朝統治下で社会ができた」という表現で漢族優位社会の形成を表現している。若林正文「諸帝国の周縁を生き抜く 台湾史における辺境ダイナミズムと地域主体性」川喜田敦子・西芳美編『歴史としてのレジリエンス—戦争・独立・災害』京都大学出版会、2016年所収、138-139頁を参照。

66 足立栗園、前掲書、12頁。

質やいわゆる「清国人」との関係など<sup>67</sup>、「土蕃」よりも詳しく記録されている。上記の内容により、「土蕃」はのちに「生蕃」、「高砂族」、「高山族」と呼ばれる山岳部の先住民、対して「土民」は平野部の先住民、すなわち「熟蕃」、「平埔族」であると推測できる。

一方、本論文の関心の所在である漢人と思われる「清人」という分類があるが、詳細な記述が見当たらず、「土蕃」と「土民」との関係から言及される形にとどまっている。例えば「土蕃」関連の記述では、「清国人」は彼らの敵視する対象とされ<sup>68</sup>、また「土民」関連の記述では、「鳳山県附近の人民は支那広東府の人民と雑居して其間睦まじく」、また「土民」の性質・外見を表現する箇所では、「その生活の状態は大に質朴にして、容貌の如きも清国人よりは柔和にして」<sup>69</sup>いるといった記述がある。漢人は住民の風習ではさほど触られていないが、鄭成功や清朝統治期の事件を述べる段落や章節では、それぞれ事件の行動者として述べられている。

『台湾誌』（参謀）では、住民の構成について「位置、広袤並二人口」という章では、住民についてただ「人口ハ支那人及ヒ熟蕃人ヲ合セテ大約三百万人」と簡潔な記述しかないものの、「風俗並二生番風俗」と述べられており、漢人の関連記述も増えたことがわかる<sup>70</sup>。

『台湾事情地理風俗』（天野）においても人口に関する記述部分で、台湾の住民は「支那人種」、「熟蕃族」、「生蕃族」からなり、合わせて三百万以上の人口があるが、「未開国なるを以て充分の調査を遂ぐる能はず為めに確實なる数を得る事能はざるなり」<sup>71</sup>という現状を示している。ここで一つ指摘しておきたいのは、「土民」という表現の使用対象である。漢人は「台湾の土民」とされ、その大抵は「支那」南方の福建廈門の人民であり、「満州地方の言語は毫も通せず通訳官は総て用をなさず僅に土民中文字を解する者を捕らへ筆談にて用を便し居る有様なり」、また朝鮮人又は「支那人」の如く日本人より体格長大であるといった記述に示されるように<sup>72</sup>、実際に漢人の記述は「土民」という呼称も使用されているが、「台湾の土民は鬻鬻を多く有するを以て唯一の最大名

67 同上書、12-13頁。

68 同上書、12頁。

69 同上書、13頁。

70 参謀本部『台湾誌』1895年1月、1頁、67-81頁。

71 天野馨（寒英）、前掲書、14頁。

72 同上書、61頁。

譽と為す」<sup>73</sup>と先住民と思われる記述も散見しており、書物の全体としては乱雑、散漫な印象を与えている。

『台湾諸島誌』（小川）では、台湾の住民について詳細な記述があり、漢人について、「本島の住民は大別して二とす、一は所謂蕃人にして、時代不詳の古代より本島に住居し、人文の程度極て低き人民なり、一は大陸の移住民にして支那固有の文明を本島に輸入せる支那人なり」と、他の文献と比べると比較的高く評価されていることが読み取れる<sup>74</sup>。

次に「台湾住民の構成は常に日本人の理解に混乱をもたらず」ということが記された『台湾実況』（権藤）では下記のように指摘されている。

台湾の事を談するもの住民に及べば必ず一疑あり、何となれば所謂台湾人とは是れ熟蕃人なりや將た支那人なりやの問題未だ明かならざればなり、請ふ先つ台湾人の何物たるやを明かにせん、夫れ蕃人か台湾固有の住民にして支那人の近年移住し来りたるものたるや論を俟たずと雖、蕃人の猶生野なるとの東半部の深山に蹙められ、既に化塾したるものは其数は蕃人に十倍し、今は客を以て主に代はるの情状を呈したれば、自から之を以て台湾人と称するに至れり、然とも蕃人亦た台湾固有の住民にして今猶命脈を保たれば宜しく台湾人とし之を同視すべき也<sup>75</sup>。

このように、いわゆる「台湾人」について、移住してきた「支那人」が「客を以て主に代」わって「台湾人」と呼ばれるようになったが、「蕃人」こそ台湾本来の住民であり、同じ「台湾人」とすべきという認識も示されている。続いて、先住民や漢人はさらにそれぞれ複数の人間集団に分類できるということがこの当時述べられているのである。また以下のようにも記されていた。

斯の如く台湾人中には蕃人と支那人との二種ありて大別せらる、而して蕃人中更に生蕃、塾蕃二大別を出たし、支那人中にも亦た広東、福州、廈門、喀家等の数小別あり一様ならず、要するに台湾は是れ一種の海島殖民地なれば諸色の人種、風俗、言語等を混合し来りたるものに他ならず、以上の

---

73 同上書、106頁。

74 小川琢治『台湾諸島誌』1896年2月、142頁。

75 権藤震二、前掲書、39頁。



諸種を通して住民の総数は約三百万人と称す、固より拠るべき算礎を有したるものにあざれとも思ふに大差なからん歟<sup>76</sup>。

このことから先住民に関しては山岳部と平野部という基本的に長らく継承されていたそもそもの生活地の区分による認識はこの時期からあったことが再度確認される。なお、詳しい検討は後述するが、漢人については「広東」・「福州」・「厦門」・「喀家」などの集団に分かれるとされている。

台湾住民全体について比較的詳細な記述があるもう一つの文献は『台湾事情』（松島、佐藤）である。本書では、台湾北部の住民は「二大人種に區別せらる、一は即ち支那人にして蒙古人種たり、他は即ち土人（Aborigines）にして馬來人種たり、熟蕃生蕃の二者より成る、欧米人の来り住する者ありと雖も其数少なく其勢力未だ数ふるに足らず、而して此の二人種は或点までは互に相混化せずして個々独立せり」<sup>77</sup>と書かれている。

これらの文献で使用される呼称について、「支那人」は明らかに漢人を指していると断定できる。その他、「土蕃」、「蕃人」、「生蕃」といった名称は明らかに未開人であることが含意される<sup>78</sup>。これに対し、「土人」、「土民」といった表現は、先住民を指す場合もあれば、漢人を意味する場合もあり、いずれにして、この時期の辞典類の文献をみると、「土人」や「土民」などの呼称は「その国土ニ生レツキタル民」、「その土地の人」などと定義されるのみで、未開人の意味は含まれていない<sup>79</sup>。

以上、この時期の台湾住民全体の構成と呼称をみてきたが、次に住民の相互関係や相互感情をみてみたい。台湾は本来先住民の土地すなわち、「台湾島は古来蕃族の住居地なれば正史の見るなきは勿論なれども」<sup>80</sup>というのが当時の共通認識といえるが、当然ながら漢人と先住民の相互感情も注目されていた。その描き方には、基本的に二つのパターン、すなわち漢人との教化交流と生存競争と二つの視点が併存しており、前者は多く平野部の先住民を例として説明することが多いのに対し、後者は山岳部の先住民が中心となっている。

76 同上註。

77 松島剛、佐藤宏、前掲書、87頁。

78 中村淳「土人」論—「土人」イメージの形成と展開、篠原徹編著『近代日本の他者像と自画像』柏書房、2001年5月所収、100頁。

79 同上論文、94頁。

80 天野馨（寒英）、前掲書、14頁。

教化交流の視点からの語りとして、『台湾志』（足立）があげられるが、ここでは「生蕃」は悪者遣いされ、それに対し「土民」は教化を受け協和的とされている<sup>81</sup>。また、『台湾誌』（参謀）では、台湾先住民の風俗は、「生番風俗」として記載されているが、これらの記述より漢人との関係も垣間見える。まず、台湾の「生番ノ種族」については、大まかに「一日パイワン種族二日クデボン種族三日クアミヤス種族四二日ク平埔種族即チ是ナリ」と、四つの種族に分けることができるとされている<sup>82</sup>。そのなかで「支那人」との関係が深いものと説明されたのは、第四の「平埔種族」であった。そこでは、「平埔番」、すなわち「支那人」のいう「熟番」は「父ハ支那人ニシテ母ハ生番ナリ」という説があるが、外国宣教師によれば全く別な種族であるともされている。この民族は性質が温良であり、また農事にも長けているが、近時漸次「支那人ト混合シ自然昔日ノ風習ヲ脱去スルニ至レリ」とされている。

なお、ここでは平埔族は、「支那人」より優れた種族として描かれている。例えば、「平埔番」の婦人は体格がよくて行動ぶりも活発であり、「彼ノ支那婦女子ノ柔弱ナル比ニアラス」のである。「支那人」男性と結婚し、支那の服装を着るようになったが、行動上よりやはり支那の婦人と容易に識別できるとされている。また、支那の婦人は外国人を見ると恐怖心を起したり逃走したりするが、「平埔番」婦人は沈着且つ謹慎で何等の人に対しても「悦テ答フルニ躊躇セサルナリ」と記されている<sup>83</sup>。

『台湾諸島誌』（小川）でも、「一部は邱陵及び平野に住み支那人と交通し、其制度に服し文物を採用し、衣服風俗大に其感化を受け、耕作漁獵を以て生を営み、耶蘇教を奉じ、其村落に教会学校を起し、最下等の支那人に比すれば却て優る所あり、是れ支那人の所謂熟蕃なり」<sup>84</sup>とし、漢人への教化程度により先住民を評価するが、教化されたものは、場合によって漢人に勝ることもあるとも記述されている。

一方、『台湾実況』（権藤）では、権藤が自ら新港で熟蕃の村落で骨格・言語・風俗が支那人と変わりのない雑種なるものを多く見かけた経験から、熟蕃と称するものには多数の変血蕃人を交えているとして混血による変化を強調する一方、「支那の王化に熟し支那の風俗を摸」え、「支那人に対する敵意を去り

81 足立栗園、前掲書、12頁。

82 参謀本部、前掲書、71-72頁。

83 同上書、77-78頁。

84 小川琢治、前掲『台湾諸島誌』23-24頁。

往来交易する」と支那人からの影響を述べている<sup>85</sup>。

これらからわかるように、現在「平埔族」に分類される「熟蕃」には、好意的な視線が読み取られ、漢人はそれとの比較の際はマイナスなイメージとして描かれている。他方、生存競争の主役は山岳部の先住民であり、現在の台湾では広く「原住民」として公的地位を得た人々であるが、そこでもやはり漢人は悪者として描写されている。

『台湾誌』（参謀）の「某領事ノ生番視察」では、漢人と先住民の生存競争が「支那人ト生番ノ関係ハ外国人ト生番ノ意外ニ親密ナルト異ニシテ生番ノ支那人ニ対スルモノハ是マテ数百年来同一ノ地ニ在テ相知ルニモ拘ハラズ外人ニ対スルノ優情ナルニ反シ常ニ不親不和目スルニ仇敵ヲ以テスルニ至ル」と述べられている<sup>86</sup>。その原因について、「支那人ニ至テハ初メ台湾ニ移住セシキヨリ今日ニ至ルマテ常ニ狡智ヲ以テ生番ヲ瞞着シ己レヲ利セシトスエノミ汲々タリ固ヨリ其間ニ毫モ友愛心ト云ヘルモノアルヘキヲナケレハ自然生番ノ嫌忌ヲ来シ遂ニ相仇敵スルニ至リシヲ以テ到底両者ノ間ハ和親ヲ見ル可ラス」とされている<sup>87</sup>。

『台湾諸島誌』（小川）の中でも、「住民には数種の別あり、本島に支那人及び外人の入りたる以前より生活せる土人あり、大陸より移住せる支那人あり、其土人は馬來人種にして、一部は全く野蛮の状態にあり、粗暴にして鬪争殺伐を好み、人を殺して其首級を獲るを以て一種の功名とし、殊に支那人を襲撃して之を殪し、其首級を取り辮髪を断ちて粧飾品とす、平生は狩猟捕魚を以て産業とし、耕作する所は黍、甘藷の類にして、深山幽谷の内に住す、是れ支那人の所謂生蕃にして、屢々外人に対して残忍の挙動を為し、本邦政府の嘗て問罪の軍を興したる牡丹社の如きは之に属す」<sup>88</sup>と山岳部の先住民のいわゆる「残酷性」を指摘しているが、「其現在の状態は尚ほ未開の境遇を脱する能はざれば、優等なる移住民と猛烈なる競争に堪ずして漸次衰亡せんとする兆候あり」と漢人との競争で劣勢に立たされているとも結びつけている<sup>89</sup>。

先住民との生存競争に関する記述は『台湾実況』（権藤）にもあるが、生蕃の生存空間は支那人の狡猾により迫られ、「生蕃の支那人を見ると仇讎畜なら

85 権藤震二、前掲書、42頁。

86 参謀本部、前掲書、99頁。

87 同上書、99-100頁。

88 小川琢治、前掲『台湾諸島誌』23-24頁。

89 同上書、142頁。

ず、支那人を見るときは其肉を割き、其骨を嚙んで甘心せんと欲するもの、如し、反之内地人若しくは西洋人に対すれば頗る温順にして毫も敵意を蔵えざるもの、如く」<sup>90</sup>とされている。これについて、『台湾事情』（松島）においても「此地に移住せる支那人は甚だ侵略的なり、今猶ほ蕃人を追究して其の山地に迫れり」など、他文献とも同調である<sup>91</sup>。

以上、台湾住民の相互感情の関連記述では、全体として漢人は多くの場合、脇役的・悪者的な存在である。これに対し、先住民の場合はいわゆる「未開性」や「残虐性」が表現される一方、日本人との親和性・類似性が強調される文献もある。これらの人々が同じ固有住民との生存競争のなかで常に敗者になり、生存の危機に迫られる存在とされる。なお、日本の台湾領有が始まった時点で、先住民のなかの開化を判断する基準は、それ以前の優位文化である漢人の文化に依拠するしかないが、そこでもやはり漢人の影が薄く、反対に平野部の先住民は漢文化の影響を受け、文化が向上している一方、いくつかの方面では却って漢人よりも優れているという構図が見受けられる。

これまでの研究でも指摘されているように、このような構図は多くの場面においても存在し、またこの構図も漢人に比べて同じマイノリティーという立場にあり、しかし植民者としての日本人が、自らが漢人に対して先住民を文明化に導いていくという役割を主張する際の根拠にもなっていた。

## 2. 「移住支那人」の構成と来歴

漢人移民が古くから台湾で活動していたことは周知の如くだが、社会は鄭成功や清の時代を経て形成してきたという段階的な移民認識は多くの文献で確認される。例えば、『台湾誌』（参謀）の「風俗並ニ生番風俗」では、中国大陸から移住してきた漢人について「古昔」の移民と「輓近」の移民とに分けられている。前者について、「其風俗尚ホ古昔ヲ貴ヒ今ニ至ルモ往々朱明ノ余風ヲ存シ」と述べられており、清朝統治以前の移民を指していると考えられる。これに対し、後者については「重ニ福建省ノ南部及ヒ広東省汕頭等ノ人民」であり、清朝以降の移民のことと伺える<sup>92</sup>。

また、『台湾諸島誌』（小川）では「本島に移住る支那人は支那大陸南部地方

90 権藤震二、前掲書、41頁。

91 松島剛、佐藤宏、前掲書、87-88頁。

92 参謀本部、前掲書、67頁。

の人民にして、過去三百年許の間に本島の大部分を占領し、豊饒富贍の別天地を開拓せるによりて其企業の大なるを見るべし、其繁殖の旺盛なることも亦た驚くべく、三百万と称する本島の人口の大部分は此人民なりとす」<sup>93</sup>と述べられ、その構成について、「総説」では「支那人の本島に移住せるものは福建及び広東地方の人民即ち閩人粵人にして、其閩人は鄭氏の蘭人を逐ひて本島を占領せる以前より已に住居せるものあり、明朝の遺民にして風俗淳良なりと雖、別に粵人即ち客仔Hakkasなる種族あり、広東の東北の山地より移住し、地を拓き田を作り蕃人を圧して之を鬪ふを辞せざるのみならず、往々一揆を興して支那政府に抵抗せる例あり、慍悍勤勉にして蕃人と雑婚するを嫌はず」<sup>94</sup>という記述がある。さらに、第八章の「住民」では、「土人の外現今本島に生息する人民は概ね支那人種のみなり」<sup>95</sup>とされ、また「支那移住民の内、古昔支那本部より来れるものは古を尚び今に至るも尚往々朱明の遺風を存し、男子は耕作を業とし、婦女子は刺繡裁縫に巧なり、輓近の移住民は多くは福建省の南部及び広東省汕頭近傍の人民にして風俗は衣服、住居、飲食に至るまで其本土の風俗と大差なく、男子は辮髪し、女子は大抵足を縮む」<sup>96</sup>とされている。詳しい内容は後に述べるとするが、いわゆる「客仔」は「粵人」と混同され、一種の特殊な「支那人」として認識されると伺えるが、基本的にはやはり明鄭と清朝の二段階移民観が示されていることがわかる。

「移住支那人」の台湾入植について、『台湾実況』（権藤）では、「唐、宋、元諸代より対岸の人民自然に交通を起し移住植民を企つもの多かりしは疑いを要せず、但政治上の關係を生したるは顔思齋を始とし、鄭芝龍、鄭成功等の相次きて台湾に拠しことあるのみ、之を以て支那民族移住の第一着となすは大なる誤なれども支那政府より盛に移住を奨励したるは清朝康熙年代の以後に在りと云ふ」（傍点著者）<sup>97</sup>と、つまり鄭成功時代の漢人移民は僅かであり、清朝の時代に定着をみたと述べ、ある意味では「明清二段階移民観」について反対の意見を述べているとも読み取れる。

また、『台湾実況』（権藤）では、「此対岸諸州より来れる移住民は今猶其故郷の言語、風俗を襲用し殆んど融化する所なきが如し、是を以て既に数百年前

93 小川琢治、前掲『台湾諸島誌』142-143頁。

94 同上書、24頁。

95 同上書、166頁。

96 同上書、167頁。

97 権藤震二、前掲書、43頁。

より移住せるもの一目しても其郷貫を区分するに難しからず<sup>98</sup>として漢人移民の分布について詳しい記述を残している。台湾の「支那人」は、「福州人」、「廈門人」、「広東人」に分類されているが、それぞれの分布地域、移植ルート、風習が対比のように記されている。(表1を参照)。

また、こうした「移住支那人」の相互感情について、「此の如く南、中、北三部に在りて移民の根本を異にしたるより言語、風俗等相一致せず、常に其間の反目疾視を免れざるが如し<sup>99</sup>とし、なかでも「広東人最も他移住民の嫌悪を受くるも広東人又た他移民の圧倒を受くるものにあらず、往々争鬪を起し戦血を各部落の間に流すとありと云ふ<sup>100</sup>と指摘している。表1からも、「広東人」とされた特徴は実際に「客家人」のものという部分があるが、逆に言えば「客家人」はいわゆる「移住支那人」の範疇には存在していなかったともいえる。現在一般的に漢人と認識される「客家人」について、台湾領有初期の認識はまだ固まっていないことを物語っているともしえるだろう。

しかし、この少し後の時期に刊行された文献を見ると、「客家人」が「支那人」の一部として認知されていることが『台湾事情』(松島、佐藤)からわかる。例えば、「支那人の大部分は福建省の地より移住し来れり、廈門の言語を用ゆ、所謂福老Hok-lo是なり又た他に客家Hak-kaと称するものあり、支那の北部より来り一旦広東省の地に住し、のち台湾に移れるものなり、其数少し、福老と言語生活を異にせり<sup>101</sup>とあるように、「支那人」は「福老」と「客家」に分類されている。また、「福老」に関しては、「福老は台湾北部に住する支那人中八分の七を占む、国姓爺の台湾より蘭人を逐ひし時、其対岸の福建省は人口多く其住民潮の如く此地に移り来りぬ、爾後大に繁殖し又た年々相継いで移住するもの絶えず、茶摘時の如き毎年廈門より来る支那人凡そ一万其内数百人は茶摘終ると雖も猶ほ本島に留ると云ふ、彼等は廈門語を操り、其風俗は大同小異なり、婦人の服装は全く相似たり、其足を縮む習慣の如き異なる所なし」という説明がある<sup>102</sup>。対して「客家」は「台湾の北部に大約十万人ありと云ふ、新竹苗栗の都邑に住し支那人と蕃人との間の媒介、蕃地境界の案内者なり、勤勉勇敢にして戦争を以て道を開けたり、稼穡に力む、故に福老零落し蕃人餓ゆ

98 同上書、43頁。

99 同上書、44頁。

100 同上書、46頁。

101 松島剛、佐藤宏、前掲書、85-89頁。

102 同上書、89頁。



表1 『台湾実況』における「移住支那人」の関連記述

	福州人	廈門人	広東人
分布地域	「北部台湾乃ち台湾淡水台北、新竹諸地方に於ける移民は福州人最も多し(是れ然ども唯た多数を占むると云ふのみにして中壙附近の如きは広東人の部落を成すもの亦た少からず、廈門人の如き者亦た決して少しとせず)」	「中部台湾乃彰化、嘉義地方に於ける移民は廈門人最も多し、(固より亦た広東、福州等の移民を交へたりと雖其比例は福州の北部台湾に於けるものよりも更に多きが如し、)」「殊に彰化城、鹿港街の如きは廈門の産物市に満ち、廈門語に通せざるもの極て少しと云ふ、廈門人の多きを以て見るべし、」	「南部台湾乃台南、鳳山、打狗地方に於ける移民は広東人最も主要なるか如し、」「故に人数を以て之を論すれば廈門人或其上に居るべしと雖、勢力に至ては優に之を圧倒せるもの、如く、現に台南府第一等の建築たる両広会館は広東、広西両省の商業会議所等を見て知了すべし、」
移住ルート	「地理的自然の結果にして、北部諸港より福州に至る航路は纔に一百五十海哩にして正に相對し、斜に廈門に至るものは二百五十海哩を隔て、香港乃広東に至るものは更に斜線をなして四百余海里を隔つ、福州人の多き他州人に勝るもの固より異むを要せず、」	「要するに是れ亦た地理的自然の結果にして、鹿港大安諸港より廈門に至る航路は僅々一百海哩強にして兩岸正に相對し、南方香港乃広東に向ふもの北方福州に向ふものは共に斜線をなし、香港を距ること三百余海里、福州を距ると二百海里弱たり、」	「抑も安平、打狗諸港より大陸に通ずる航路は廈門に至るもの(百五十海里強)最も近く福洲(二百五十海里)広東(三百海里)最も遠しと雖も地形を以て之を云へば最も相依り共に南端に在りて相對す、」
風習	「要するに、家屋、道路の構造より飲食衣服等に至るまで多く福州の風俗なりと云ふは其多数なるか為なり」	「風俗習慣の廈門に近かるべきは固より論を俟たず」	「福鼎人と廈門人とは風俗及び言語の点に於て頗る一致類似する所あり、多くは反目の勢を成さずと雖、広東人は風俗大に異なり言語同じからず(或は種族と同ふせずと云ふものあり)」「緊足の習慣ある支那人中に在りて、広東婦人は独り其足を保ち随意に發達せしむる」 「広東人の住居する村落は殆ど広東人のみにして、他の移民と雜居すると極めて稀なりとす」

出典)：権藤震二『台湾実況』東京法学会、1896年4月、44-46頁。

るの間に立ちて客家のみは繁盛にして富を累ぬ、其の用ゆる言語は広東語なり雖も客家の青年福老の語を学ぶを以て客家の語は消滅せん、其婦人は福老の婦人の如く足を縮めず強健肥滿能く戸内に立働き且つ田畑に出て、夫の耕耘を助く」<sup>103</sup>と述べられ、全体的にいえば比較的中立的・概略的な説明がされているように見える。

なお、1899年に刊行された『台湾紀要』（村上）では、第三編「人文」、第一章「人種、人口、族制」に「支那移住民」に関する記述があり、また図2のように住民の分布を示す図も入っている。その記述を見ると、漢人は「閩人（福建省出身）」「粵人（広東省出身）」に分けられており、また、「支那移住民」について、下記の通り説明されているが、やはり「明清二段階移民観」という認識の枠組みが存在し、さらに「客家人」をめぐる解釈を見ると純粹な「支那人」から排除されていることがわかる。

台湾の未だ鄭成功の手に落ちざる以前より既に幾分の閩人ありしが成功の本島に覇したりしより倍々多く移住するに至る而して子孫相継で本島に住するもの之れを明朝の遺民と云ふ性質頗る温良気節祖先の性を享けて稍や高きを見る鄭氏の亡びて本島清国の手に落つるに当り一種の感慨を懷きて移住したる者即ち粵人あり此属は性慄悍勤勉にして屢々蕃人と闘ひ彼れを圧して其地を畧し又動すれば清政府に反抗したりしを以て、台湾の清国官吏も一時大に此等粵人の制御に困じ法を設けて自由渡台を禁せんと迄したることありき之れ後に蕃人と雑婚して支那人の爲めに客仔（内山の客人との意より出づ）なる名を負はされたるものなりとす而して此等支那移住民の現今居住する地方は脊髓山脈以西一帯と東海岸の部分となり人は云ふ東海岸のもの西海岸のものとは同じ支那人族にして其風俗を異にすとは或は然らん<sup>104</sup>

ここでは、すでに多くの先行研究でも指摘されているように、文献で語られる「移住支那人」は現在の台湾漢人への認識に完全に当てはまるものではなく、その主体である「福佬人」に近いということがわかる。なお、領有前後は台湾漢人に対して「清国人」や「支那人」などの呼び名が使用されていたが、領有

103 同上書、89-90頁。

104 村上玉吉、前掲書、94頁。

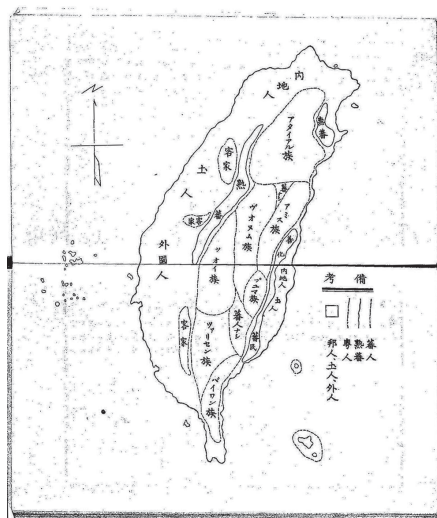


図2 村上玉吉『台湾紀要』警眼社、1899年。

後は「支那人」に定着したようである。

以上のように、この時期における台湾漢人への認識の枠組みの大きな特徴の一つとして論じてみたいのは、「明清二段階移民観」である。ばらつきこそあるが、大まかにいえば、この移民観とは、台湾漢人は明鄭と清朝の二つの時代に亘って移住してきた。鄭成功時代の漢人移民は明朝の遺民であり、性質が温良である。対して、清朝以降の遺民で反抗的であり、領有初期の現在、日本政府に反旗を立てるのは主にこういう人たちだという認識である。前者のほとんどは「閩人」、「福建人」だが、後者は「粵人」、「広東人」（文献によって「客家人」と混同される）とされている。

このような対比的な叙述を日本の江戸時代における台湾認識、ひいては東アジア認識に照らし合わせてみると、実に近世における「華夷変態」からもたらされた「華夷観」をも彷彿させる<sup>105</sup>。そもそも、「華夷観」はもともと明の時代に形成された、文化的優劣によって中国と周辺諸国との関係を秩序づける中

105 近世における東アジアの華夷観の変化について、岸本美緒「東アジア・東南アジア伝統社会の形成」、岸本美緒他編著『東アジア・東南アジア伝統社会の形成：16-18世紀』岩波書店、1998年所収、44-47頁を参照。

華主義的観念を指すが<sup>106</sup>、「華夷変態」と表現される1644年の明清の王朝交代で朝鮮では「小中華意識」が、日本では「日本型華夷意識」がそれぞれ成立した。1715年に世に問うた近松門左衛門の『国性爺合戦』は東アジアの華夷観変動時期に成立し、18世紀前半の庶民の華夷観形成に大きな影響を及ぼした作品である。それが明清交代という華夷変態に直結する重要なテキストと評されるように、明と日本両方とつながりをもつ鄭成功のイメージが、日本での「華夷観」の逆転的な意味を有していた。このような明＝華（日本と親和性がある）と清＝夷（日本の敵）との比較の要因も入った「華夷観」が、鄭成功の最後の拠点であり、また清朝のもとで漢人の主要な入植地としての台湾に、そしてその移民への認識に引きずられているという部分があることを思わせる部分はなくもない。こうして台湾住民の主体たる漢人のなかでもさらに日本人と親和性のあるものを区別し、そうでないものを敵として定義していくという構図が存在すると考えられる<sup>107</sup>。

もう一つ指摘すべき特徴は、完全ではないが、領有当初の地誌的文献では、現在「客家人」と呼ばれ、本来広東省また福建省の山岳部に暮らし、「客方言」を話す人々は屢々「支那人」の範囲から捨象されていた。また、こういう人々は前に述べた「明清二段階移民観」と相まって、時々領有初期の抗日活動の起因として説明されるのである。

### 3. 「移住支那人」の境界線をさまよう種族「客家人」

前述のように、領有前後において、現在台湾の漢人集団の一つであり、また台湾四大エスニック・グループの一つとして認識されている「客家人」は、当

106 『岩波 哲学・思想事典』岩波書店、1998年、201頁。

107 井上厚史「『国性爺合戦』から『漢国無体 此奴和日本』へ—江戸時代における華夷観の変容」『同志社国文学』58号、2003年3月、61-62頁。江戸時代において鄭成功の認識といえ、川口長孺の漢文著作『台湾鄭氏紀事』が挙げられるが、著者の見識が記された「跋」をみると、日本人として鄭成功を語り知る意義が述べられている。「成功者芝龍之子而其母乃我平戸之産也芝龍之客平戸娶以為妻生成功及芝龍事明身致富使人迎成功及其母既而芝龍降清成功不從方清兵之陷泉州軍民皆潰成功母独不屈而死夫以孱弱一婦人能抗醜虜不辱其節可不謂之烈婦哉当此之時明室既亡冠帶之國變為左衽搢紳之士改節易操者滔滔皆是而成功僅以一彈丸之地迺能抗滿清百万之兵竭力明室始終不渝忠貞之心堅如金石可不謂之忠臣哉」「夫芝龍反覆之徒固無足道然妻為烈婦而子為忠臣忠義貞萃一門何其盛也蓋成功母子雖其忠烈出於天性亦非我神州風氣之所使然歟然則鄭氏之有成功不遑明國之光亦我神州之華也」。川口長孺「台湾紀事跋」『台湾鄭氏紀事下』1828年、1頁。

時の文献では非常に特殊な存在として描かれていた<sup>108</sup>。以下、この「支那人」の境界線を彷徨う「客家人」像を見ていく。

『台湾誌』（参謀）では、「客家人」は現在の認識と異なり、「支那人」と別個の存在として認識され、また在来住民の全体のなかで別格とされていることは、「客家人」への描写が「純粹支那人」と「生番」、すなわち台湾先住民のあとに続くという配置から伺える。そこでは、「客家人」は「客家」のほか、「哈咯」という別名をも持つとされ、また「生番」とも「支那人」とも別種族で、「一目シテ支那人ト異ナル所ナシ然レモ支那人ハ別個ノ種族トシテ即チ其名ノ如ク他ヨリ来リシ客人ナリト云フ」と述べられている。なお、その由来を遡れば広東省南部より移住してきた人々であり、「何レノ時ニ於テ渡台シタルヤハ未タ詳ニスル能ハサルナリ」と書かれている。

また、この人間集団は、「広東ノ客家」、「四川貴州雲南ノ苗子」、「海南島ノ李家」、「福建北部ノ狗頭番」、「浙江温州地方ノ蛋家」と同じような集団であるが、「支那人ヨリ之レヲ見レハ一種化外ノ民ト為スモノ尠カラス」とある。台湾内部の民族関係からすれば、台湾の「客家人」は「純粹ノ支那人」と常に争闘しているともし、その住居地はちょうど「生番地」と「支那人住居地」の中間で、農作に従事しており「支那人」から「内山ノ客人」とも呼ばれるとされている<sup>109</sup>。「哈咯」という表記はここで初見と思われるが、その描写に関しては領有以前の「客家人」の知識が反映されているといえる。このような「客家人」に対する認識は、同書に収録された「某領事ノ台湾視察」にも触れられている<sup>110</sup>。「客家人」は「支那人」とも「生番」とも別の種族という認識である。

次に、『台湾諸島誌』（小川）の「客家人」に関する記述は次の通りである。「別に粵人即ち客仔Hakkasなる種族あり、広東の東北の山地より移住し、地を拓き田を作り蕃人を圧して之を闘ふを辞せざるのみならず、往々一揆を興して支那政府に抵抗せる例あり、慄悍勤勉にして蕃人と雑婚するを嫌はず客仔の村落は大に島内に蔓延し北部及び南部の山地に最も多し、現任我総督府の命令に反抗する島民は此種族に多きが如し」<sup>111</sup>とし、同じ内容は第八章の「住民」で

108 このことは、戴国輝「日本の植民地支配と台湾客家」、戴国輝著・春山明哲ほか編『戴国輝著作選Ⅰ 客家・華僑・台湾・中国』みやび出版、2011年4月所収、149-152頁にも指摘されている。

109 参謀本部、前掲書、80-81頁。

110 同上書、180-181、183頁。

111 小川琢治、前掲『台湾諸島誌』24頁。

も記されている<sup>112</sup>。風俗について「支那に布教せし仏人ピントンの記せる所あり、事情瑣雑に渉る所あるも、台湾に住する客家の特性を知るに足るべき」という記述があり、台湾の「客家人」について、やはり西洋宣教師の中国大陆で宣教経験を参照にしていることがわかる。また、「客家の故郷に於て観察せる所の如し、険を冒して職業を国外に求むる支那人に此種族に属するもの多く、台湾と汕頭と相距ること極て近くして台湾は山野饒富なる処なれば、嘉応州より流溢して汕頭に出て、陸続本島に移住し来るは毫も怪に足らざるなり」<sup>113</sup>として、また「客家人」の性質について「近似我師に抗し、頑妄の挙ありし土匪なるものは大抵此種族に属す」や「此種族は争を好み、屢々清廷に対して一揆を起せることあり」などとして、さらに清朝に編纂された地方誌である『台湾府志』に「客民」や「客仔」といった記述があり、また「客家の跋扈して、支那官吏之が統御に困むの情之に因て見るを得べし」とも評している<sup>114</sup>。ここでは、「客家人」Hakkasは「粵人」、「客仔」と同義という認識が持たされているほか、領有後の乙未戦争の情勢にかかわる認識も加わった。また、先住民と雑婚する種族であるという認識もあった。

上記の「哈咯」・「客仔」以外、「喀家」という表記もあったことは、『台湾実況』（権藤）から確認される。その性質について、「喀家は呼んでハーカーと称し一種の好血種族にして、多く生蕃界を熟蕃界とに介まりて部落を成し、農耕を以て業となすと雖も極て鬪争を好み、屢々支那村落を襲撃し又は旅人を殺害して略奪を逞ふす、今回の戦役に方たり村落家屋の防御を以て我軍を苦しめ、又は斥候輜重等を奇襲して惨毒を恣にしたる所謂土匪は多く此好血種族に属し、衆寡勝敗の理に昧らく、唯た人を殺傷するの快を知りて未だ身を亡すの惜むべきを解せず、或は以て蕃人と支那人の間に出生したる雑種となし、或は元の末世に移住したる福建地方の山民なりとなし、殆んど一定の論を聞かず雖、支那より移住したるものたるや疑なきか如し、常に赤裸体を以て陣に臨み射撃、槍、刃の武技に練熟すると通常支那人の及ぶ所にあらず、支那人の之を畏るゝを生蕃よりも甚しく、我軍の一炬其部落を火攻するを見て快意に堪へすと云へり、此族は到底殲滅せずんば屈従せざる悪性の蛮人なれとも、全島に散在して其数頗る多く容易に滅尽すべからざるべし」<sup>115</sup>と書かれている。「客家人」は

112 同上書、167頁。

113 同上書、171頁。

114 同上書、171-172頁。

115 権藤震二、前掲書、45頁。



「福老人」と先住民との間の「雑種」とさらに上書きされていた。

これら文献を通して、「客家人」という人間集団の特徴は、「支那人」から除外され、あるいは「蕃人」との雑種で純粋な「支那人」ではないといった点が挙げられる。このような認識の背景には、前述のように、領有初期の台湾に関する知識が乏しいなかで、領有以前の西洋や清代に残された文献に依拠せざるを得ないことがあったと思われる。

16世紀以降の西洋宣教師の中国華南での伝道や著述活動により、16世紀以降、つまり明末清初の時期以降、中国の沿海地域で常に地元の土着集団から「土」と相対する「客」という「他称」で呼ばれ、衝突が相次いだ「客方言」集団の姿が伝わっていた<sup>116</sup>。19世紀後期に来台した西洋宣教師はすでに中国での宣教経験から得たエスニック・グループ分類法により台湾の漢人を「福佬」・「客家」(Hakkas)に分類し、あるいは「客家」というエスニック・グループを普通の漢人(福)から区別する認識が、のちに詳しく述べるように、「客家」という呼称は必ずしも台湾の「客人」に完全に対応できるものではなかった<sup>117</sup>。しかし、こうした西洋認識の蓄積は、領有前後の地誌的文献にも参照され、台湾の「客家人」に当てはめられた形跡が見受けられる。

しかし、「客家人」を純粋な「支那人」と別個の集団とする認識は、単に西洋宣教師の文献を根源としていたわけではない。清朝の台湾統治時期における文献にもその軌跡が確認される。清朝統治下は漢人を中心とした移住民社会が本格的に形成した時期であったが、移住民は主として福建省・広東省からの人々で構成され、史料上は「閩人」・「粵人」で表現されている<sup>118</sup>。このような表記は実に省レベルの出身に基づく区別法に由来するものであるが、この時期の漢人を分類するための線引きはそれだけではなく、実に「土」「客民」という呼称も混じっていた。ちなみに林正慧もこの時期の人間集団の分類は、省籍と言語の二重指標の複合的に成立しているということを示唆している。「客」という字の中国語ではそもそも「外来」「輓近」といった意味があり、それが中国の移民史に照らし合わせれば、明清時期の「客方言」を使用する人々が福建・広東・広西の辺区から江西・四川・広州に遷移するときに土着民と紛争が起きたから、「客」エスニックグループとして標識化された。

116 林正慧『臺灣客家の形塑歷程—清代至戰後的追索』臺北市、國立臺灣大學出版中心、2015年2月、34-37頁。

117 陳東昇、前掲論文、4頁、15-17頁。

118 林淑美『清代台湾移住民社会の研究』汲古書院、2017年7月、5頁。

一方、清朝統治下の台湾における歴史文献の「客」の指す対象は、2つのレベルから考えるべきである。一つは、土着に対する「客」、つまり先住民や清朝以前からやってきた漢人に対して「閩人」・「粵人」も「客」である。もう一つは、台湾は福建省という視点から、福建省からの移民「閩人」が主で、「粵人」が「客」である<sup>119</sup>。なお、清朝時代の台湾方志の編纂ブームは康熙50年代に現れた。具体的に、当時の社会経済の変化や県級行政の本格的展開という背景で三つの県でほぼ同じ時期にはじめての県志の編纂がみられ、また三冊目の『台湾府志』もこの時期に増補が完成した。なお、はじめて編纂された県志の挙げられる共通の特徴の一つは、「客民」の関連記述が大量に出現したことである。ここでの「客」は現地の福建省移民が省籍で区分される他者を呼ぶときに用いる他称であり、現在にいう「客家語を話す」人々という意味ではない。そこでは、「客民」は極めてマイナスなイメージで描かれている<sup>120</sup>。これは康熙40年代にようやく社会経済的地位を固めた「粵人」が県志の編纂に携わった「閩人」紳士という行政上の本拠民の目からみれば、警戒すべき「客民」であるという当時社会と民族間の緊張関係の反映といえたとされている<sup>121</sup>。これらの「客民」はすなわち「客家語を話す客家人」ということが長らく誤解されていたが、この「客民」は広東省潮州地方出身の人々に対する福建省の我々から区別するための他称であり、「客家人」に対するエスニックグループの名付けではないと指摘が続く。

林淑美によれば、清代において官憲側の視点からみて「客民」や「客子」として表記された集団は台湾に寄寓した福建人、広東人のことであり<sup>122</sup>、一方福建省の泉州人・漳州人が多数を占めた民間からは、「客人」、「客」、「山客」、「客仔」などの呼名は間違いなく客家人であるとしている<sup>123</sup>。いずれにして、清朝の文献において「客」という表現はつねにマイナスなイメージを伴う言葉だったのである。

上記を踏まえつつ、領有後の情勢も見逃してはならない。乙未戦争「客家

119 林正慧、前掲書、156-157頁。

120 具体的に、「好事軽生」、「健訟楽闘」、「無家無室」などがある。李文良『清代南臺灣的移墾與「客家」社會（1680～1790）』臺北市、國立臺灣大學出版中心、2011年2月、130-138頁。

121 同上書、127頁。

122 林淑美、前掲書、37-43頁。

123 同上書、51-54頁。

系」の抗日ゲリラが多かったということも、日本人に「客家人」は反乱集団という印象を与えたことには違いない。さらにこのような認識もまた江戸時代から言い伝えられてきた華夷変態が台湾の「明清二段階移民観」に当てはめられ、「客家人」は清朝以降の移民であり、明のその性質と異なり、反乱の傾向のある集団であるという認識に助長したと考えられる。

1897（明治30）年に、総督府が「客家族」に対して全面調査を行った<sup>124</sup>。この調査により「客人」があるが、「喀家」はないとの報告を受け、実在しないエスニック・グループであると判明した。また後に実施される人口センサスのなかで福建出身者とともに行政上さらなる単純化の道をたどっていく<sup>125</sup>。

「客家人」は、歴史上先住民に対し優位に立ち、在来住民の主体としての漢人という範疇に含まれながらも、漢人のなかでは「福佬人」に比べれば少数となり、台湾内部の民族関係の重層性と複雑さを恰好に反映させる人々であった。このような特殊な立ち位置は、台湾領有初期の漢人と先住民という二大カテゴリーという住民への認識において、まさに分類という単純化をしていくに当たって混乱や支障をきたす要因となっていることは、数多くの地誌的文献から明らかに確認できるのである。

#### 4. 中国大陸における「支那人」の特徴との異同

本稿で考察している台湾漢人は、その本場である中国大陸からの「移住支那人」のため、その風習・言語などを述べる際に、当然ながら本場の「支那人」との比較も意識される。例えば、『台湾誌』（参謀）を始めとする多くの文献では、「移住支那人」の風習について、前者は「男子ハ耕作ヲ業トシ婦女子ハ刺繡裁縫ニ巧ナリ」<sup>126</sup>、そして「其風俗ハ彼等カ本土ノ風俗ト大差ナシ」<sup>127</sup>と、

124 「喀家族ニ称スル戸数人口表」『台湾総督府公文類纂』1897年5月、11094-10。

125 「福建族」・「広東族」という分類は、台湾漢人の原籍というよりも、彼らの言語が基準となった。福建省汀州府出身の漢人は、「客家語」をしゃべるため、「広東族」として分類。対して、広東省潮州府出身の漢人の言語は、「福佬語」に属するため、「福建族」として分類。つまり、種族と言語は単純な対応関係という認識、或いは行政上の効率に基づき、「福佬語」と「客家語」を「福建語」と「広東語」に置き換え、それらの言語を用いるエスニック・グループを「福建族」と「広東族」と名付けた。したがって、清朝時代の「閩」・「粵」という省籍の区分概念が、そのまま日本に継承されたようにみえるが、実はその意味はまったく違うものになった。

126 参謀本部、前掲書、67頁。

127 同上書、67-68頁。

中国大陸と台湾の風習は大して変わらないとする記述が多いが、『台湾実況』（権藤）では、「移住支那人」の性格について抽象的な記述が多く、また中国大陸との比較を意識した内容が随所見受けられるのである。ただ、その多くは日清戦争に従軍した経験のあるものによるもののためか、北清という地域に限定されている部分が多い。

まず、台湾の「支那民族」の美風について、権藤は二つを挙げ、一つは「支那人」は孝悌の古道に随ひ、婚葬の大礼を重んじ、聖賢を敬まひ文学に尊ぶことであり、このような美風は「營々利を之れ事とする支那民族の脳中における一異例なり、台湾人の如きも植民地的の澆風なきにあらざるも以上の諸行に於ては転た景慕を表するに足るものあり」、勿論「父母あるか為に其企図を絶ち葬を送るに偽泣者を雇ひ、或は文学を尊崇するの余、労力を嫌忌するか如き弊害なきにあらざるも其過や実に君子なり」として、それらを「一に是れ古聖賢人の余沢にして東洋文明の光輝実に此に在り」と評している<sup>128</sup>。もう一つは「武勇の風俗」である。台湾の「支那人」は元々広東・福建の「古の所謂南方の強」の民であり、「金革の武骨」を有し「水火の間に入出入して恐るゝを知らず、死を視ると真に帰るか如きもの往々にして之れ有り」。例えば日本軍に抵抗する「義民」は、昔朱一貴などの騒乱の際に編成した義勇軍団の苗裔である。「武勇の風俗あると以て想ふべし」と評している<sup>129</sup>。なお、陋習に関しては「鴉片の流行」、「檳榔の嗜好」、「婦人の緊足」（広東の移住民を除く）が挙げられている<sup>130</sup>。

「支那人」同士の比較について、「北清との差異」という見出しの段落で、権藤は「北清を觀て台湾を見ざるもの或は同一風俗と誤了するの恐なきにあらざ」として、台湾と北清の差異、または台湾の「支那人」は北清のそれとの差異も指摘している。

具体的に、まず扁額の文字を取り上げ、北清では拝金宗の文字が多いことに對し、台湾では「忠信孝悌礼義廉恥の雅言」が見られると指摘している。次に、気風について、台湾漢人は「有為的にして事を好み」、挙動は「酷薄惡むべし」、器物は「簡便にして実用多く」、性質は「複雑にして猜疑多」いことを挙げているが、對して北清人は「無為的にして事を好まず」、その挙動は「優

128 権藤震二、前掲書、63頁。

129 同上書、63頁。

130 同上書、64頁。

容愛すべく」、また器物は「古奇にして雅味多し」、そして性質は「単純にして権変少なく」としている。これはすべて台湾の「山水險隘にして艸樹の鬱陶」と北清の「風物天空地濶にして景光閑古」という相反する「天地自然の感化」によるものと結びつけている<sup>131</sup>。

近代日本の中国認識において、1893年に岡倉天心が論じた「中国南北異同論」のような議論もあることが指摘されているが<sup>132</sup>、ちょうど日本の台湾領有直後という近い時期における地誌的文献にも、権藤の著作のように、「支那人」同士でも具体的な事例・特徴を取り上げて相対化を試みるという姿勢が確認できる。

## 5. 流布と共有

以上、本稿で取り上げた地誌的文献の内容を細かく見てきたが、様々な背景が混ざり合い伝えられた台湾漢人認識は、日本内地で引用書・情報源としてある程度流布・共有されていたことは、特に学校教育上において新領土を知るという需要による出版から多く確認される。

中学科の教材として、1895年6月に服部誠一により編纂された『台湾地誌』の凡例はまさにそのような事情が伺える。まず、編纂の目的について、それは帝国臣民に速やかに日本の新領地理の一斑を知らせ、帝国戦勝の結果により清国より譲与された新領地について注目・牢記させる必要があるため編纂を速成させたものであると述べた上で<sup>133</sup>、本書の製作について、その編纂は一般の地理書に模範を取っているものの、台湾の地理に至ってはまだ人跡の到らざる所が多いため、「多少隔靴爬痒ノ感」を免れない<sup>134</sup>という不備も認めつつ、依拠する材料の状況を以下のように説明している。「本書ハ引用書ニ乏レク、広ク内外ノ書ヲ參觀スルニ、採テ以テ材料ト為スベキモノハ寥寥タリ、今姑ク其信ズベキモノニ就テ之ヲ撰撰シ、以テ本書ヲ編纂セリ、故ニ其誌ス所ハ以テ台湾全島ノ概況ヲ知ラシムルニ過ギザレバ、他日ノ実測ヲ待チ、大ニ改定増補スル

131 同上書、65-66頁。

132 岡倉天心が1893年7月～12月のはじめての中国旅行で南北の異同など地域の相対性に着目したことに関する研究として、村田雄二郎「岡倉天心の中国南北異同論」『東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要ODYSSEUS』第22号、2018年3月、37-50頁がある。

133 服部誠一『台湾地誌』三協合資会社、1895年6月、凡例4-5頁。

134 同上書、凡例5頁。

所アルベキナリ」<sup>135</sup>。ここでは具体的な文献こそ明示されていないが、後述するように、同時期の地誌的文献に依拠するところが多いことがわかる。

この『台湾地誌』（服部）は中学科を標準とし教科用に編纂したものであり、教員の参考書や一般の人が台湾地理を知るための指南でもある<sup>136</sup>。人種に関する記述をみると、台湾先住民は「土蕃」と呼ばれ、「馬來人種」の性格を有しているが、その相貌は日本人に似ているところが多い人種とし、現に「平原土蕃」と「山地土蕃」の二つの人種に繁殖されていると認識されている。なお、台湾の西北の海岸に住むものは概して「支那本部」より移ってきたものであり、男子は耕耨を業し、女子は繡箔<sup>ママ</sup>を善くし、本島の天然の富源を開拓し物産の繁殖を致す人々であり、これらの「移住支那人」は最も勢力があるとされている<sup>137</sup>。なお、台湾漢人の性質について、「移住支那人」は「風俗淳朴ニシテ、明末の遺風ヲ存ス」<sup>138</sup>というイメージが持たされていることは、他文献とも共通している。



図3 石井宮三郎『台湾新地誌』田沼書店、1895年、15頁。

また、石井宮三郎の編集で1895年9月に田沼書店より出版された『台湾新地誌』では、所謂「移住支那人」を「土人」と称し、「客家人」を「客人」とし

135 同上書、凡例4-6頁。

136 同上書、凡例1頁。

137 同上書、33-34頁。

138 同上書、40頁。



ているが、記述については、やはり参謀本部からの引用が中心となる<sup>139</sup>。なお、小学校向けの教材という性質のためか、図3のように、漢人と先住民を対比させるイラストも入っている。

その他、1896年3月に刊行された高等小学校用の下石政之進『台湾地理』（児玉活版所）の緒言では、出版が急を要した様子が諸言から見てとれるが<sup>140</sup>、人種の部では台湾漢人について「支那本部ヨリ移住シタルモノ」など、簡潔な記述に留まるが、やはり参謀本部から引用されていることが伺える<sup>141</sup>。

次に、興風学館の編集で1896年3月に神戸書店より刊行された『改訂小学新地誌附録台湾小誌』をみると、台湾住民の構成について、「風俗」という項目で、「支那人種」と「土蕃」（「土蕃」はさらに「熟蕃」・「生蕃」に分けられる）の2種からなるという認識が確認される。「支那人種」の性質をさらにみていくと、「支那人種ハ、彼カ故国ノ風俗ト大差ナキモ、体格ハ一般ニ善ク、力量モ亦強ク、能ク事ニ耐フレドモ鴉片烟ヲ嗜ムユエニ、其中毒ニヨリテ、身体枯瘦シ、氣力衰ヘタルモノ、往々路頭ニ徘徊セリ」<sup>142</sup>という描写がある。また、「土蕃」との関係も、「支那人種」は「生蕃」に敵視されるものの、「熟蕃」の風俗はほぼ「支那人種」と同じであるなどのことが書かれている<sup>143</sup>。さらに、「生蕃熟蕃ノ外ニ、客家ト称スル一族アリ、元来支那ヨリ移住シタルモノナレドモ、無頼ノ頑民ニシテ、住民ト相和セス」、「此種族ハ、生蕃ト支那人トノ中間ニ居ヲ占メ、専ラ農業ニ従事セリ」<sup>144</sup>という「客家人」認識も基本的にこの時期の地誌的文献と同様である。なお、図4に示したイラストが入っている。

このように、日本内地における学校地理教育の出版物の記述は簡潔や挿絵付きなどの特徴が見受けられるが、この時期における地誌的文献が情報源として参照されていたことがわかる。そして、当時の日本人が地誌的文献を通して、これまで検討したような漢人像をはじめとした台湾情報を再認識していく中、小中学校の学生もこのような知識の流布の範囲に入り、新領土の住民などに触れる機会を与えられていく。

139 石井宮三郎『台湾新地誌』田沼書店、1895年9月、10-12頁。

140 下石政之進『台湾地理』児玉活版所、1896年3月15日、緒言。

141 同上書、17-22頁。

142 興風学館編『台湾小誌』1896年3月、8頁。

143 同上書、10頁。

144 同上書、10-11頁。

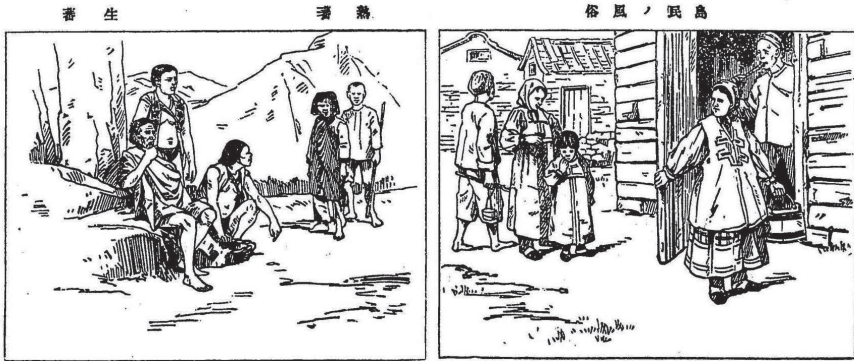


図4 興風学館編『台湾小誌』神戸書店、1896年3月、71頁。

### おわりに

以上のように、本稿では台湾領有初期（直前の時期を含む）の地誌的文献を取り上げ、漢人に関する情報を中心にみてきた。台湾住民の主体たる漢人について、江戸時代から日本にもその存在が認識されていたが、関心の焦点は鄭成功などの人物に集中され、人間集団としての認識が乏しかった。また、台湾出兵から領有初期までの時期には、日本の台湾住民に対する認識は先住民に傾いていたことが特徴として挙げられるが、領有が決まると、台湾住民全体を含んだ新領土を知る需要が高まり地誌的文献が大量に刊行されるなか、漢人についても再認識をする契機となった。

こうしたテキストに共通される大きな特徴は、台湾領有前後に大量に出版された地誌的文献のなかで、当時の統治条件等によってか実際に台湾に赴いたことがなく、たとえ実際に台湾経験があっても、現地住民との交流が乏しく、既にある台湾関連資料や一部の台湾関係者の見聞に基づいて製作されたものが多いことである。したがって、このような文献によって伝えられる台湾漢人像は、具体的な接触経験がまだ乏しい時期において、ある意味で現実から浮いた認識といえよう。これらの知識は、粗製濫造までいかなくても、そこには西洋の、江戸時代の、そして清朝の台湾住民認識、さらに台湾領有後の治安状況が混同された、想像と真実が混じり合ったものだった。

そして、台湾の現実に見合った学知の形成は、児玉源太郎・後藤新平時代の台湾慣習研究会（1900年）<sup>145</sup>、臨時台湾旧慣調査会（1901年）<sup>146</sup>などにより展開された様々な調査・著述活動や事業を待たなければならなかった。これらの

「台湾旧慣調査」は多くの台湾漢人に対して聞き取り調査を実施し、また多くの契約文書や慣習についての資料をも収集していたから、「台湾人による「台湾社会」の対象化」と「日本人による台湾認識」といった点で意味を持っているとされている<sup>147</sup>。

一方、「臨時台湾戸口調査」(1905年)という当時の日本全土を見渡しても日本初の本格的な人口センサスは、日本の台湾領有直後から台湾住民の人口や戸数の調査の必要性が認識されていたことからが実施されたが、そこにはやはり台湾に住む人々を何者として認識しようとするのかという渴望が存在した<sup>148</sup>。このような人口調査は単なる調査のみならず、民族・人種を再配置する分類的構築であり、システムティックな数量化に向けての準備でもあった<sup>149</sup>。富田によれば、その人口センサスの準備過程において漢人のカテゴリーの形成は定かではなく、この調査が採用した種族と言語のカテゴリが日本の統治者から台湾社

145 本団体は民間研究団体として1900(明治33)年に発足した。その中心メンバーは総督府と法院・警察の関係者であり、民間人では弁護士と銀行員が多いが、その調査活動は日本統治以前の歴史・地理・教育・文化・宗教・風俗・人口などに及び、その研究成果も各会員の調査報告、討論議決、旧慣積義及び台湾の民情風習の雑録などの形で月刊機関誌『台湾慣習記事』(1901-1907)に収録された。これらの調査結果が、必ずしも政策的に活用されたとは限らなかったが、後世にそれ以前の台湾漢人を知るための記録を系統的に残してくれた。終刊のあとも『法院月報』(のちに『台法月報』)に併し、慣習に関する研究報告は引き続き法院・警察関係者の維持により掲載され、台湾の慣習や民俗に関する研究の基礎となった。

146 1901(明治34)年に設立された本組織は、台湾総督の監督に属し植民地政府の立場に立つが、台湾の公法・私法上の慣習、農工商に関する旧慣、外国の植民地の制度と実態などについて大規模な調査を行っていた。これらの調査から、『台湾旧慣制度調査一斑』(1901年)、『台湾土地慣行一斑』(1902~1905年)といった成果が生まれた。鄭政誠『臺灣大調査：臨時臺灣舊慣調査會之研究』臺北縣、博揚文化、2005年、63頁。

147 春山明哲「台湾旧慣調査の歴史的意義」、西川潤・蕭新煌編『東アジア新時代の日本と台湾』明石書店、2010年2月所収、339-340頁。

148 1905(明治38)年に行われる予定の日本初の国勢調査が日露戦争の影響もあって見送られたが、台湾では新領土の統治を円滑に行うために民政長官の後藤新平が臨時台湾戸口調査部の部長として実施し、日本領土内初の本格的な人口センサスとなった。のちに1915(大正4)年と同じ臨時台湾戸口調査が、そして1920年以降内地と同時に1940(昭和15)年まで計5回の国勢調査が行われているが、1925年の調査までは「蕃地」の先住民が調査の対象外とされていた。富田哲「1905年臨時台湾戸口調査が語る台湾社会—種族・言語・教育を中心に」『日本台湾学会報』第5号、2003年、87-88頁。

149 白石隆・白石さや訳『増補 想像の共同体：ナショナルイズムの起源と流行』NTT出版、1997年、275-281頁。

会に向けられた想像の反映という考えから、その形成過程にも注意を払う必要があるとしている<sup>150</sup>。これについて、本稿で検討してきたこともこのような形成過程を多少なりとも反映するのではないか。

---

150 富田哲「台湾総督府の「種族」・言語認識—日本統治初期の人口センサス・戸口調査・通訳兼手当—」、崔吉城・原田環編『植民地の朝鮮と台湾—歴史・文化人類学的研究—』中京大学社会科学研究所、2003年所収、118-119頁、120-121頁。